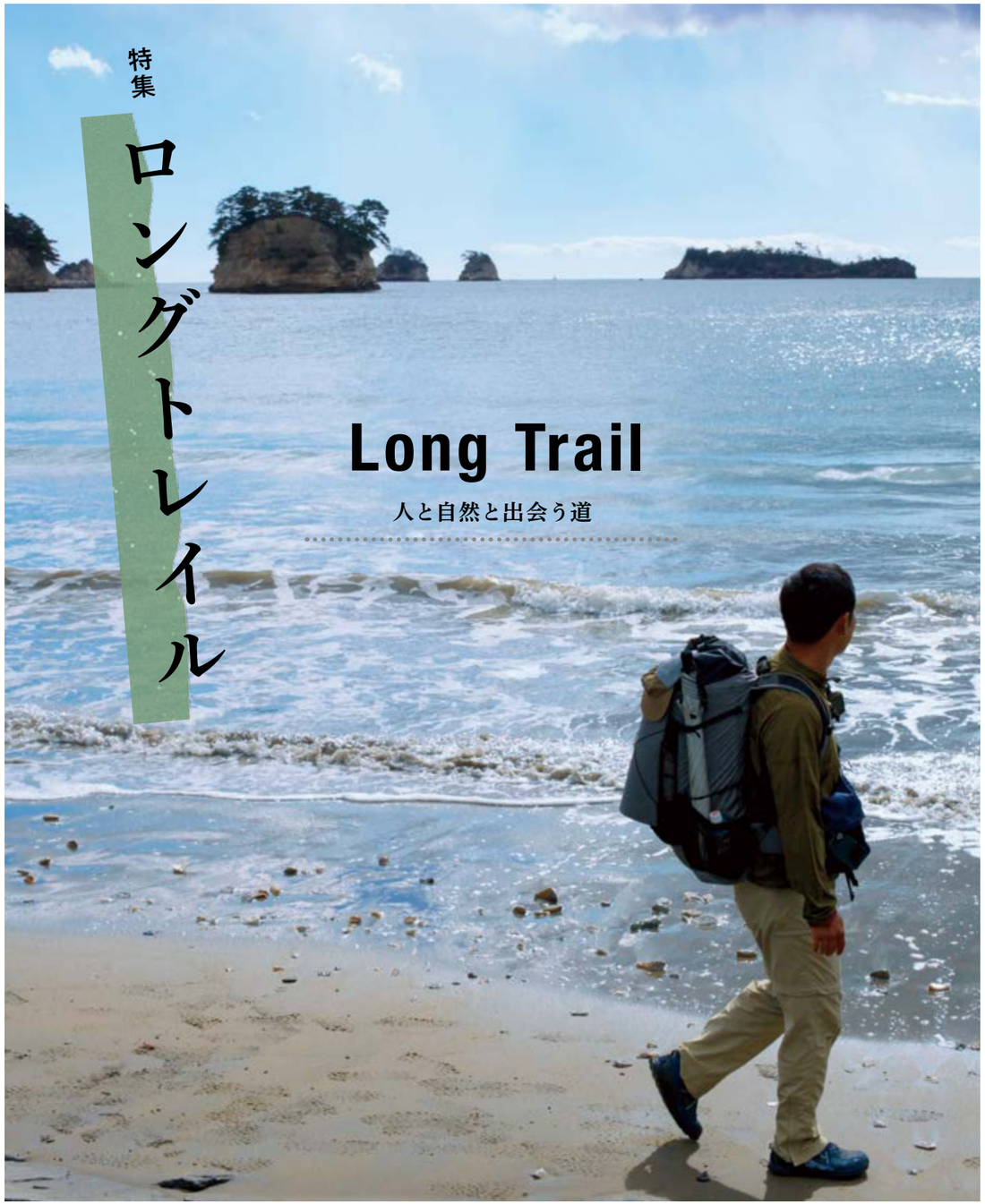
グリーンレター
Green Letter
No.40
年１回発行
2018.12



特集
ロングトレイル
Long Trail
人と自然と出会う道

知床連山を望む（2018 年 10 月）

富士フイルム・グリーンファンド（FGF）とは

公益信託富士フイルム・グリーンファンド（ＦＧＦ）は
富士写真フイルム株式会社が創立 50 周年を機に
新しい分野での社会還元を志し、
自然環境の保全・育成のための
基金拠出を決意し、1983 年に設立されたものです。
民間企業による、自然保護をテーマとした公益信託としては
日本で最初に設立されたもので、この 35 年間に、
自然環境の保全・育成に関する活動や研究に対して
数多くの助成や支援を行い、成果を上げてきました。

●概要

設立年月日　1983 年 10 月 12 日
委託者　富士フイルム ホールディングス株式会社
受託者　三井住友信託銀行株式会社
受託財産　1,000 百万円

●事業内容

ＦＧＦは４つの事業を進めています。
①未来のための森づくり
②緑のための支援事業
③緑とふれあいの活動助成
④緑の保全と活用の研究助成
＊今年度の活動は本誌 25 ページからのFGF 通信にあります。
＊現在、本公益信託の事業は、日本国内を対象に行っています。

The Fund is the very first charitable trust in japan which was estabilished by a private enterprise for the purpose of nature conservation.For the last 35years.since its establishment,the Fund has been applied toward a number of successful programs for support of various activities and research works concerning nature conservation.

● OUTLINE

Date of establishment : October 12 1983
Trustor : FUJIFILM Holdings Corporation
Trustee : The Sumitomo Mitsui Trust & Banking Co.,Ltd.
Fund : Japanese Yen 1,000,000,000

● ACTIVITIES

1. Creating opportunities for exchange between people and green environment
2. Promoting communication between concerned people in support of green environment
3. Supporting activities for conservation of green environment
4. Supporting research works for conserving and fostering green environment

＊ Currently, the fund is applied to domestic activities only.

2019 年度 助成申請予定
応募の締め切り 5月7日（火）

2019 年度の活動･研究助成の申請は 2019 年3月１日より受付を開始いたします。応募要項をご希望の方は、ハガキまたはファクスに住所･氏名･電話番号･研究あるいは活動助成の別を明記の上、下記宛てにご請求ください。また、一般財団法人自然環境研究センターのウェブページ (http://www.jwrc.or.jp/) からも当該文書をダウンロードすることができます。
〒 130-8606　東京都墨田区江東橋三丁目３番７号　江東橋ビル
（一財）自然環境研究センター内　公益信託富士フイルム・グリーンファンド事務局　　TEL. 03-6659-6310（代）FAX. 03-6659-6320

編集後記

2011年3月、震災が起きて2週間ほど経った時に、当時、私が勤めていた環境省に加藤則芳さんが訪ねてこられました。2005年に半年かけて歩いた全長3500㎞のアパラチアントレイルのことを話しながら、「日本でも地域と共に育てる生き生きとしたロングトレイルを実現してほしい、三陸の沿岸に地域の皆さんと一緒につくりましょう、私も応援します！」と提案されました。

加藤さんのお話を一緒に聴いた環境省の仲間と話し合い、みちのく潮風トレイル構想は動き出します。道づくりのための現地踏査や各地で開いたワークショップの様子を加藤さんに報告すると、病床から身を乗り出して、たくさんの大切なアドバイスをくださいました。

それから7年、いま900㎞を超えるロングトレイルの全線が開通しようとしています。そこで今回は「ロングトレイル」というテーマで特集を組むことにしました。

国内からは『みちのく潮風トレイル』をはじめ、『信越トレイル』、『熊野古道』、『世界自然遺産 奄美トレイル』という様々なタイプのロングトレイルを紹介いただき、海外からはアメリカ、シエラネバダの原生自然の中を抜けていく『ジョン・ミューア・トレイル』や、イギリスの美しい田園景観を巡る『コッツウォルド・ウェイ』などの魅力を伝えていただきました。

特集のまとめとして開いた座談会では、木村宏さん、シェルパ斉藤さんと「ロングトレイルが目指すもの」について語り合いました。

座談会の会場、新宿御苑インフォメーションセンターは、2011年10月に加藤さんと国立公園やロングトレイルをテーマに鼎談を行った場所です。その時、加藤さんは知床のことにふれ、世界遺産登録が注目されているが、国立公園や地域の取り組みの歴史がそのベースにあることを忘れてはならないと語りました。地域と共に歩む国立公園、そして、地域と共に育てるロングトレイルを目指していきたいと感じました。

この秋、知床の地を訪ね、澄みきった空のもとを歩きながら、加藤さんからいただいた宝もののような数々の言葉を思い起こしました。

「自然が大事だと語るだけでは伝わらない。歩いて肌身を通じて感じる人が増えてこそ自然を大事にすることにつながる。」こうした加藤さんの思いが多くの人たちの力によって、ひとつひとつ実現していくよう願ってやみません。（W）

Green Letter 2018 No.40

表紙写真：茂木綾子
写真家、映像作家。92 年キャノン写真新世紀荒木賞受賞。97 年よりミュンヘン、06 年よりスイスのラコルビエールにて活動。09 年淡路島へ移住し、アーティストコミュニティ「ノマド村」の活動を展開。写真集『travelling tree』（赤々舎）（2013）、映画『島の色 静かな声』（2008）、『幸福は日々の中に。』（2015）、『zen for nothing』（2015）など。表紙写真は、みちのく潮風トレイルをスルーハイクした長谷川晋氏。　塩竈市・浦戸諸島の野々島で、本線から少し降りたところにプライベートビーチを見つけ、一人てくてく歩き眺める多島海の風景。

特集 ロングトレイル

3 特集とびら
ロングトレイル
人と自然と出会う道

4 東北を歩く
みちのく潮風トレイル
相澤久美

コラム
シェルパ斉藤さんが歩いた
みちのく潮風トレイル

10 信越トレイルの
終わりなき旅
根津貴央

12 ふたつの巡礼の道を歩く
熊野古道と
サンティアゴ巡礼道
多田稔子

14 「世界自然遺産
奄美トレイル」のチャレンジ
前田尚大

16 ジョン・ミューア・
トレイルの魅力
勝俣 隆

18 イギリスの歩く道
山本裕実子

20 座談会
「ロングトレイル　人と自然と出会う道」
木村宏×シェルパ斉藤×渡辺綱男

25 FGF 通信
・2018 年度事業報告
（FGF が展開する 4 つの事業紹介、自然観察路コンクール受賞作品紹介など 2018 年度の活動）
・2018 年度助成先決定
・2017 年度助成先の紹介
・過去の助成先の今（2014 年度助成）
愛子こどもの森の保全とふれあい活動

34 FGF 助成一覧

40 号に登場してくださった方々

相澤久美（あいざわ　くみ）
1969 年東京生まれ。建築家・編集者・プロデューサー。米国で学んだ後帰国し 97 年に設計事務所を設立。建築設計の傍、雑誌の編集、ドキュメンタリー映画の製作・配給、災害支援、防災情報紙の発行等を行う。2015 年からみちのく潮風トレイルの運営計画策定に携わり、2017 年に NPO 法人みちのくトレイルクラブ設立。理事としてトレイルの運営、利用促進、広報等を推進する。

シェルパ斉藤（本名・斉藤政喜　さいとう　まさき）
1961 年長野県生まれ。八ヶ岳南麓に自らの手で家をつくり、火を中心とした田舎暮らしを実践している紀行作家。アウトドア雑誌を中心に紀行エッセイを長期連載中で、著作は 30 冊以上。野営道具を背負って国内外のトレイルを数多く歩いているバックパッカーでもあり、犬連れ旅や自転車、オートバイ、ヒッチハイクなど自由な旅を 35 年以上継続している。

根津貴央（ねづ　たかひさ）
1976 年栃木県生まれ。大学卒業後、広告会社でコピーライター職に従事。2012 年にライターとして独立し、アメリカのロングトレイル「パシフィック・クレスト・トレイル（4,264km）」を踏破すべく渡米。2014 年からは、ネパールの「グレート・ヒマラヤ・トレイル(1,700km)」の踏査プロジェクトに参画。以来、毎年ヒマラヤに通う。2018 年 4 月、ライター＆エディターとして TRAILS に正式加入。

多田稔子（ただ　のりこ）
和歌山県生まれ。和歌山大学教育学部卒業。2006 年に設立された、田辺市内5つの観光協会で組織する「田辺市熊野ツーリズムビューロー」の会長に就任。日本における DMO（観光地域づくり組織）の先駆けとして、熊野古道エリアを「世界に開かれた上質で持続可能な観光地」とすることを目指して活動し、国内外で高い評価を得ている。

前田尚大（まえだ　なおひろ）
1990 年東京生まれ。鹿児島県環境林務部自然保護課奄美世界自然遺産登録推進室。2014 年環境省入省。本省勤務、知床国立公園・世界自然遺産知床での現場勤務を経て 2017 年より現職。中学生時代以来に訪れた奄美の自然に感動する。「世界自然遺産　奄美トレイル」の推進や、世界自然遺産推薦地の核心地域における利用適正化対策などに取り組んでいる。

勝俣　隆（かつまた　りゅう）
1972 年東京生まれ。ハイカーズデポ・スタッフ。2000 年よりヨセミテ通いを始め、2004 年からサンフランシスコに在住しジョン・ミューア・トレイルを含むシエラネバダを歩く。2014 年にアパラチアン・トレイルを踏破。以降、シエラネバダに毎年通い、「ＪＭＴガイドブック」を執筆。現在は八ヶ岳南麓に居を移し、シエラネバダとジョン・ミューアの研究を行う。

山本裕実子（やまもと　ゆみこ）
1992 年兵庫県神戸市生まれ。京都大学大学院農学研究科森林科学専攻修了。修士課程でイギリスの Rights of Way とナショナル・トレイルの管理運営について調査を行う。2016 年に環境省に入省。現在は万座自然保護官事務所にて、上信越高原国立公園の保護管理等を行っている。

木村宏（きむら　ひろし）
1961 年東京生まれ。大学卒業後、リゾート開発、ホテル経営会社勤務を経て、長野県に移住、日本型 DMO の先駆け、信州いいやま観光局の運営を実践。観光まちづくりに関わる。また、「信越トレイル」の整備・事業化や「みちのく潮風トレイル」の構想段階から参画し、日本のロングトレイルの普及活動にも従事する。北海道大学観光学高等研究センター 特任教授。

渡辺綱男（わたなべ　つなお）
1956 年東京生まれ。1978 年に環境庁に入庁、全国の国立公園や野生生物の保護管理にあたる。釧路湿原の自然再生や知床の世界遺産登録、生物多様性条約 COP10 の開催、三陸復興国立公園づくりなどに携わり、2012 年環境省を退官。現在は自然環境研究センターや国連大学に勤務。著書に『日本の自然環境政策』（東京大学出版会）など。

千田初男（ちだ　はつお）
1947 年宮城県生まれ。愛子ハグリッズ運営委員長。中学時代からバイクに乗り始め、レースに憧れて大学時代の19歳、富士スピードウェイで初レース。本田技研に入社し、のち仙台に戻りレース関係の仕事に従事、子どもが６年生の時初めて学校とかかわりを持つ。９年前愛子小学校新設に伴い現在の子どもの森活動を開始、子どもを中心にした夢を追える授業と活動を目指している。

編集制作　一般財団法人　自然環境研究センター
編集人　渡辺綱男（（一財）自然環境研究センター上級研究員）
編集協力　星野俊彦（富士フイルムホールディングス株式会社）
デザイン　株式会社アートポスト
印刷　株式会社高陽堂印刷

発行　公益信託　富士フイルム・グリーンファンド
受託者　三井住友信託銀行株式会社

本誌に関するお問い合わせは
〒130-8606　東京都墨田区江東橋三丁目３番７号　江東橋ビル
（一財）自然環境研究センター内　公益信託　富士フイルム・グリーンファンド事務局
TEL. 03-6659-6135

特集 ロングトレイル

人と自然と出会う道

（撮影／シェルパ斉藤）

（撮影／シェルパ斉藤）

ロングトレイル。まだ聞き慣れない言葉かもしれません。

ロングトレイルとは、「歩く旅」を楽しむためにつくられた距離の長い道のことです。登頂を目的とする登山とは異なり、登山道やハイキング道、自然散策路、里山のあぜ道、ときには車道などを歩きながら、その地域の自然や歴史、文化にふれることができるのがロングトレイルです。そして今、じわじわとロングトレイルを歩く楽しさに魅了された人が増えてきています。

ロングトレイルとは銘打たなくとも、日本には、「四国八十八ヶ所遍路」や「お伊勢参り」など歩く文化が古くからありました。また、国や自治体でも、1969年の東海自然歩道構想の発表以降、全国をつなぐ「長距離自然歩道」のネットワークづくりが進められてきました。

構想発表から50年を迎えようとしている長距離自然歩道に改めて光をあて、地域と連携しながら歩く魅力を高めようとする活動も広がりつつあります。

いま、その「歩く」という文化そのものを見つめ直す機運が高まり、多くの人たちの協働による「ロングトレイル」が注目を集めています。

来年3月に全線が開通する予定の被災地復興の道、「みちのく潮風トレイル」をはじめ、開設から10年目を迎えた「信越トレイル」、古くからの信仰の道「熊野古道」、世界自然遺産推薦地を含む奄美群島の島々を巡る「世界自然遺産 奄美トレイル」、そして日本のロングトレイルの発展に尽力された故・加藤則芳さんがこよなく愛したアメリカの「ジョン・ミューア・トレイル」、イギリス全土に張り巡らされた歩道の魅力や田園景観が美しいコッツウォルズの道（Cotswold Way）も紹介します。

記事のまとめとして開いた座談会では、日本ロングトレイル協会の常務理事であり、実践的な観光まちづくりの研究者である木村宏さん、自由な旅を30年以上続け、『シェルパ斉藤の世界10大トレイル紀行』の著者である紀行作家の斉藤政喜さん、そして環境省自然環境局長時代に先述の故・加藤則芳さんとの出会いが、みちのく潮風トレイルの構想につながったという渡辺綱男本誌編集長の3人が、ロングトレイルの魅力や可能性、これからの課題などについて語り合いました。

きっと記事を読み終わる頃には、あなたもロングトレイルという旅に出たくなっていることでしょう。

Long Trail

東北を歩く みちのく潮風トレイル

自然・人、暮らし、歴史文化と出会う旅へ

文・相澤久美（特定非営利活動法人みちのくトレイルクラブ） 写真・茂木綾子

2019年春に全線が開通する「みちのく潮風トレイル」の統括本部を運営する「みちのくトレイルクラブ」の相澤久美さんから、歩くことで体験できる豊かな暮らしと被災の爪痕からの学びの旅へのお誘い

青森県階上町・小舟渡海岸の灯台（環境省提供）

岩手県普代村・ネダリ浜（環境省提供）

陸奥

陸奥（むつ）の国。日本の地理的区分の基本単位・律令制に基づく令制国の一つで、五畿七道の一つ、東山道に属する。飛鳥時代（592年）から、戊辰戦争に敗戦した奥羽越列藩同盟諸藩が処分、分割される明治時代初期（1869年）まで、辺境の大国として知られた。1869年に分立した岩代国・磐城国は現在の福島県及び宮城県南部に、陸前国は現在の宮城県、陸中国は岩手県、陸奥国は現在の青森県と一部岩手県（二戸郡）に相当する。今も各地の地名に名残が残る。

律令時代の東山道は、畿内と東山道諸国の国府を結ぶ幹線道路で、多賀城の陸奥国府より北は小路で、北上盆地にあった鎮守府まで続いていたという。

岩手県大船渡市・吉浜。古い街並みが残る

古事記では「道奥」（みちのおく）と呼ばれ、日本書紀には「陸奥」として多く見られる。平安時代まで「陸奥」（みちのく）とも呼ばれ、その後「陸奥」（むつ）と呼ばれるようになったと記されているが、語源は、「都からみて遠い奥」にある国。確かに遠く、平安京から陸奥国府までは25日ほどかかったという。いにしえの人々はよく歩いた。歩く旅が、旅の基本スタイルだった。

いま、みちのくを歩く

辺境の大国・陸奥の国の歴史は奥深い。語り始めると紙面が足りないが、厳しくも豊かな自然と共に育まれてきた歴史・文化に、かつて日本に当たり前にあった歩く旅の文化が新たに加わろうとしている。

平成23（2011）年、世界中を震撼させた東日本大震災後、環境省は三陸復興国立公園の創設を核とした「グリーン復興ビジョン」を発表した。「森・里・川・海が育む自然と共に歩む復興」を基本理念に掲げ、（1）自然の恵の活用、（2）自然の脅威を学ぶ、（3）森・里・川・海のつながりを強める、という基本方針の基、7つの具体的取り組みを進めてきた。地震と津波により被害を受けた沿岸部の自然の回復力を人々の生きる力にもなぞらえた。三陸復興国立公園は、「自然の恵みと脅威、人と自然との共生により育まれてきた暮らしと文化が感じられる国立公園」として、人々を迎え入れ、三陸の復興を後押しする。

もうひとつ、東北の復興に寄与し、未来に長く続く可能性を秘めた取り組みとして「南北につなぎ交流を深めるみち（東北海岸トレイル）」の敷設が進められている。大震災から8年目を迎える平成30（2018）年度末に、青森県八戸市蕪島から、福島県相馬市松川浦まで、4県28市町村を貫く通称「みちのく潮風トレイル」が、全長900キロを超える壮大なロングディスタンストレイル（歩くための道）として全線開通を迎える。

先人が歩いた陸奥を貫く東山道が通過した地点や主に沿岸を、ひたすら歩き、今のみちのくの自然や文化をより深く体験することができる「歩く旅」の新しい文化が東北に花開こうとしている。

江戸時代末期の日本地図（部分）
1855年アメリカ合衆国発行

理念を共有する

青森県八戸市から福島県相馬市まで国内において稀にみる長さを持つみちのく潮風トレイルは4県28市町村を貫く。これら県・市町村に加え、地域団体やガイド組織、個人、宿泊施設や交通事業者ほか、数多くの人々の協力と協働がなければ、この道を「一本の道」として未来に繋いでいくことは難しい。そのために、全線を一定の水準で運用していくための「計画」が関係者間で協議されているが、計画に先んじて、多様な主体間で共有するための共通理念、「みちのく潮風トレイル憲章」が策定された。なぜこの道が作られ、なんのために未来に繋いでいこうと私たちは願うのか？

憲章には、持続可能な広域連携に必要となる、時間や距離を超えて共有されるべき「想い」が記されている。

福島県相馬市・中村神社

地域の人々と、作り守る道

みちのく潮風トレイル沿線には、トレイルを応援してくれる地域の人々がたくさんいる。ハイカーにトレイルを紹介する宿、イベントを積極的に開催してくれる役場職員や観光協会の方、補給に必要な品々を提供してくれる商店、地元と国行政の橋渡しとなる環境省アクティブレンジャー、整備に協力してくれる民間団体、などなど。今回はそのほんの一部の皆さんをご紹介する。

地域の皆さんとの出会いと交流は、歩く旅の醍醐味の一つ！歩きながら声をかけてみるのも一興だ。

岩手県田野畑村・海岸沿いのルート。奥には手彫りのトンネル

断崖絶景の景観に圧倒される道

リアス海岸と旧街道を辿る道

仙台湾を眺めながら歴史文化を楽しむ道

（商店・観光協会）柳沢商店 店主
種差観光協会 会長
柳沢卓美さん

色々な風景があり、色々な楽しみ方ができる種差海岸です。植物は取らないで、撮るだけにしてくださいね。店にも立ち寄ってください。

（役場）普代村役場
総務課政策推進室　観光交流推進係
前川正樹さん

多くの方々の情熱によりつながった道。この資源を守り育て、そしてまた次の世代にしっかりと受け継いでいきたい。携われたことを誇りに思います。

（宿）休暇村　陸中宮古
支配人代行　営業兼管理課長
後藤 洋平さん

宿泊のお客様には朝食前のトレイル散歩を楽しんでもらっています。歩く楽しさと、震災遺構等からの学びを提供できるトレッキングツアーもご用意しています。

（環境省）大船渡自然保護官事務所
アクティブレンジャー
坂本麻由子さん

この道は、三陸へ訪れるきっかけとなり、また来たくなる道になる。ちょっと控えめな三陸の人々とハイカーの笑顔を繋ぐために、日々邁進して行きます！

（民間団体）一般社団法人 おしかリンク　代表理事
犬塚恵介さん

＜内の人も外の人も一緒になった、みちづくりからはじまる地域づくりトレイル＞を地域のコンセプトとしています。歩きに、つくりに、きてください。

（観光協会）相馬市観光協会　主任
井島順子さん

城下町として栄えた歴史と文化を巡るルートです。また津波の痕跡といった自然の脅威を感じながら自然の豊かさと厳しさを実感できます。年２回イベント実施中！

岩手県大船渡市・吉浜。過去の津波が伝承された石碑

宮城県気仙沼市・海上の作業小屋

宮城県石巻市・北上川を渡る大橋

シェルパ斉藤さんが歩いた みちのく潮風トレイル

（紀行作家／バックパッカー）

そのトレイルにはそこにしかない絶景がある。

まだ中学生だった息子を連れてみちのく潮風トレイルを歩いたとき、息子は断崖絶壁が続くリアス海岸の風景を見て「今まで見た景色のなかでイチバン！」と興奮した。

しかし、すべてのルートが絶景ではない。全長９００キロを超えるトレイルにおいて、絶景が楽しめるコースは一部でしかない。歩くのが辛い舗装された道が多いし、交通量が多い道路と並行する箇所も少なくない。北部のリアス海岸のコースはきついアップダウンの連続だし、南へ下れば殺風景な造成地や大きな防潮堤を見続けるコースとなる。旅人ファーストではなく、諸事情で遠回りさせられているコース設定も見受けられる。国内外のロングトレイルを数多く歩いてきた僕から見て、みちのく潮風トレイルは優れたロングトレイルだとは言えない。

でも僕は、みちのく潮風トレイルを歩き続けている。

歩くに値するロングトレイルだからこそ、何度も足を運んで歩き続けている。

道中で出会う地域の人々はシャイではあるけれど、こちらから声をかければ優しく応じてくれる。道を尋ねると丁寧に教えてくれる。そして遠い地から自分が暮らす地域を歩きに来た旅人を歓迎してくれる。車を止めた場所へ戻るためにヒッチハイクをしても、すぐに乗せてもらえる。東北の人々とのそんなふれあいがうれしくて、僕はみちのく潮風トレイルを歩き続けている。

だから多少の不便や殺風景の道も苦にならない。四国のお遍路やスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路と同じく、みちのく潮風トレイルも巡礼の意味合いを持つロングトレイルになればいいと僕は思う。

２０１３年3月に北の起点である蕪嶋神社を歩き出して5年の歳月が経ったが、僕はまだ全行程の4分の1程度である宮古市までしか歩いていない。でもそれでいいんじゃないか。何度も足を運び、長くつきあっていくスタイルが、被災地をつなぐみちのく潮風トレイルには合っている。ゆっくり長く歩いていくことで、素晴らしき東北の地と親密になれる気もするのだ。

2013年３月、次男と犬を連れて旅がはじまる

犬連れで歩く息子は地域の人々に歓迎された

みちのく潮風トレイル憲章

２０１１年3月11日に発生した東日本大震災は、東北太平洋沿岸に未曾有の被害をもたらしました。千年に一度と言われる自然の猛威に直面し、自然とどのように向き合うべきか、国内外問わず世界中の多くの人たちが考えざるを得ない大きな転換点となりました。

環境省は震災後、持続可能な地域づくりを目指すと共に豊かな自然と地域の暮らしを未来に引き継ぐため「グリーン復興プロジェクト」を策定し、取り組みを進めてきました。その取り組みの一つが「みちのく潮風トレイル」です。

自然と人との関わり方を考えるために「自然の中を歩くこと」の大切さを提唱し続けた加藤則芳氏より「三陸海岸の国立公園を通るナショナルトレイルを官民協働で」との提唱を受け、青森県八戸市から福島県相馬市までの4県28市町村にまたがり太平洋沿岸を一本の道でつなぐ、海岸のロングトレイルが誕生しました。

美しい自然や景観はもちろんのこと、地域に暮らす人々とこの地を訪れる人々との交流、自然の恵みと震災の記憶、自然との共生の中で育まれた暮らしや歴史・文化を大切にし、このトレイルに関わる人々にとって、「自然と人の共生を示す象徴の道」となり、誇りあるナショナルトレイルとして存続することを願い、ここに6つの憲章を定めます。

一　美しい風景と風土を楽しむ道とします。
二　地域に暮らす人々とこの地を訪れる人々の間に心の交流が生まれる道とします。
三　自然の優しさと厳しさを胸に刻む道とします。
四　震災をいつまでも語り継ぐための記憶の道とします。
五　豊かな自然・文化を次世代へ受け継ぐ道とします。
六　歩くことを愛する全ての人々を歓迎し皆で育てる道とします。

運営体制について

900キロの道は、環境省が地域住民らとワークショップを重ねながら検討し、既存の道を「トレイル」として設定してきた。リアス海岸特有の半島が繰り返し現われ、結果900キロ超となった道は、国道・市町村道など舗装路に加え、未舗装路の自然歩道や赤線と呼ばれる山道もある。これらの道が薮に覆われたりせず、途切れることなく人々に歩いてもらえるよう、環境省は沿線にある既存のビジターセンターやインフォメーションセンターを運営する民間団体を管理運営の中核に据え、県や市町村、地域住民らと情報共有しながらの維持管理を目指している。その統括本部として、「みちのく潮風トレイル 名取トレイルセンター」が全線開通に合わせて来春オープンする。特定非営利活動法人みちのくトレイルクラブが、トレイル全線の管理統括とセンターの運営を担う。センターでは、全路線の情報を入手することができるようになる。

東北各地で、トレイルセンターで、日本全国、世界各地からのハイカーを暖かく迎えるための準備が、着々と進んでいる。

環境省が用意してくれた道を
地域の民間団体が中心になり
守り育てていく体制が整いつつある。

歩く旅の意味

東北沿岸を通るトレイルの構想は実は震災前からあった。冒頭の憲章にもある通り、日本のロングトレイルの父といっても過言でない加藤則芳氏は、震災より前に東北沿岸部の豊かな自然・文化に着目し、ロングトレイルを作れば素晴らしいトレイルとなり東北の財産となるだろうと考えていたと聞く。奇しくも災害が起こったことで実現したみちのく潮風トレイルだが、加藤氏が長年訴えたトレイルの意義―野生の自然の中に身を晒し自らの足で歩みを進めることで得られる多くの学び―、厳しい自然の中から街に出ることで実感される人間の営みの暖かさ、日頃享受している社会システムの恩恵を再認識すること等、貴重な機会を提供する。これからの東北にとって、また高速移動が中心となった現代社会においても、900キロもの歩く旅を体験できるトレイルの存在意義は大きい。

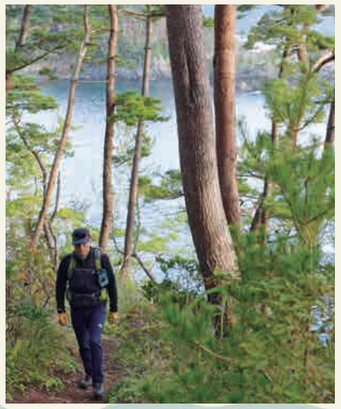
ただ歩く。

「私たちがいつ、どこから歩き出したのか知らないが、とにかく、わたしたちは歩き始め、現在のように、この地球という惑星のいたるところに広がっていった。その想像を絶する時間、歩く人々の歓びや哀しみを思うとき、私は歩行が、私たちの精神の形成に決定的なまでの役割を演じたのではないかと想像する。歩くことは、今も、私たちが自らの環境に関わり合う、もっとも直接的な行為であると信じている」

これは、淡路島で敷設されつつある小さな歩く美術館（※1）のディレクター文章からの引用だ。「（中略）再び歩くことそのものを、私たちの実在的体験と直結させることはできないだろうか？」と結ばれている。世界のトレイルを歩いたハイカーらの話を聞くと、想像を絶する長い距離を歩いた後、自分の中の何かが明らかに変わっているという。明確な答えはないが、海外で出会ったハイカーも同様のことを話してくれた。定年退職した老夫婦が長い距離を歩く姿も多く目にした。

ただ歩く。それだけのことが、広域連携の地域活性を支え、地域の歴史文化・自然環境、震災の記憶を未来に繋ぎ、人々の交流を育む場として機能するにはこれから多くの人々の協働と、たゆまない努力が必要になる。壮大なチャレンジだ。だからこそ皆で楽しく取り組めもする。ハイカーはまぎれもなくその仲間の一員だ。

皆様のお越しを心よりお待ちしています。



岩手県大船渡市碁石海岸の松林。歩かれているのは
加藤則芳氏の弟さん、加藤正芳氏

※1 淡路島の五斗長集落にある GOSSA WALKING MUSEUM のこと

民間の力を集結

沿線6ケ所のセンタースタッフをご紹介。見かけたらぜひお声がけを！

南三陸・海のビジターセンター（南三陸町）
大渕香奈子さん

街では復興の様子、険しい山道を登った先にはリアス海岸の雄大な景色、里山・海・川では人の営みを感じられるバリエーションに富んだルートです！

浄土ヶ浜ビジターセンター（宮古市）
佐々木洋介さん

海岸線、街中、半島巡り、山登りと多様な要素を兼ね備えた区間です。アップダウンが多く技術と体力が必要ですが、自然の厳しさを感じ、海岸景観の美しさを満喫できます。

種差海岸インフォメーションセンター（八戸市）
町田直子さん

天然芝生地と水平線の織りなす穏やかな風景が続きます。全世代の方が楽しめる道です。大自然が育む新鮮な食材を生かした、地域の温もりを感じる郷土食も美味しいです。

みちのく潮風トレイル名取トレイルセンター（名取市）
関博充さん

東北地方最大の平野、仙台平野を海辺からも山中からも満喫できます。この平野と海を舞台に続いてきた人々の長き営みも感じられる区間です。

碁石海岸インフォメーションセンター（大船渡市）
中野貴之さん

碁石海岸は海とヤマツバキが美しいルートです。近くには美味しい食堂もありますのでぜひ！このほか大船渡市には浜街道の歴史が楽しめる道もあります。

北山崎ビジターセンター（田野畑村）
楠田拓郎さん

北山崎に代表される崖。崖の上の林道や断崖直下の浜辺など表情豊かな自然を満喫できます。体力は必要ですが、歩ききった達成感は最高です。

トレイル沿いの美味しい食べ物

大船渡市・碁石の宿「ごいし荘別邸　海さんぽ」の夕食

女川町「おかせい」の特選女川丼

八戸市・種差海岸「海カフェたねさし」のサバサンド

東松島市・野蒜の「えんまん亭」のカキフライ定食

三陸町越喜来「カフェ・ビアン」のハンバーグ

洋野町の「干しアワビ」！
手のひらサイズの高級品

相馬市「鳥久精肉店」の
相馬牛ジューシーメンチ

信越トレイルの終わりなき旅

アメリカのロングトレイル「パシフィック・クレスト・トレイル（4，264㎞）」を踏破し、いま現在もネパールの「グレート・ヒマラヤ・トレイル（1，700㎞）」を歩いている根津貴央さんによる、日本のロングトレイルのパイオニア「信越トレイル」の魅力

文・根津貴央（TRAILS）
写真・TRAILS／NPO法人信越トレイルクラブ

美しいブナの原生林

ここ数年、日本全国に『ロングトレイル』と呼ばれる道がつぎつぎに作られている。この聞きなれない横文字にピンとこない人も多いだろうが、簡単に言ってしまえば、『歩くために作られた長い山道』だ。

そのなかにおいて、日本におけるロングトレイルのパイオニアとして名高いのが、『信越トレイル』である。これは新潟県と長野県の県境にある関田山脈を貫く全長80㎞のロングトレイル。2008年に全線開通して、今年で10周年を迎える。国内の人はもちろん、最近では海外のお客さんも多いという。

そんな信越トレイルの大きな魅力のひとつは、豊かなブナの原生林。このエリアは豪雪地帯ということもあり、1年の約半分くらいは雪で覆われている。そのため、雪の重みで根元が大きく湾曲しているブナが多い。ここを歩いていると、ブナの美しさだけではなく、厳しい冬を耐え抜いたブナの生命力を感じることができる。

樹齢200年のブナも珍しくなく、至るところに巨木がある。なかでも『鬼ぶな』と呼ばれる巨木ブナは有名で、樹齢はなんと300年以上。それを眼前にした時には、その大きさに圧倒されて立ちすくんでしまったほどだ。

関田山脈のブナ天然林にそびえる樹齢 200 年以上の巨木

山だけではなく里も楽しむ

でも、自然を楽しむこと以上に、僕が信越トレイルを好きな理由は、トレイル沿いの集落に立ち寄れることである。信越トレイルは新潟県と長野県の県境にあり、昔はこの里山を越えて行き来する生活道が通っていた。信越トレイルに存在する峠は、その生活道のなごりなのだ。

たとえば、牧峠から長野県側に下りると、飯山市の柄山（からやま）集落がある。足を運んでみてまず目に映ったのが、集落のなかでひときわ目立つ巨大な樹木。これは飯山市の天然記念物『柄山大ケヤキ（熊野神社のケヤキ）』だそうで、僕はこの木の下でしばらく休憩をとった。こんな神聖な木があるだなんて、ここに立ち寄ることがなかったら知ることはなかった。

さらに、近くの食事処では、笹ずしや田植え煮物（凍み大根の煮物）、エゴ（海草の寒天）など、飯山の郷土食も味わった。この笹ずしは、戦国時代、川中島の合戦前に飯山の村人が上杉謙信に献上したのが始まりとされていて、別名『謙信ずし』とも呼ばれている。いずれもはじめて食べたのだが、素材の味を生かした風味豊かなものばかりで絶品だった。

いつの間にか僕は、飯山という町に愛着を持つようになっていた。

集落に立ち寄り、飯山の郷土食『笹ずし』をいただく

歩いた地域を好きになる

『歩いた地域を好きになる』。これこそが、ロングトレイルの真骨頂だと僕は思う。登山であれば、そうはならない。たとえば僕が住んでいる東京の山を例に挙げるのであれば、高尾山という山自体を好きになることはあっても、八王子市（高尾山がある地域）を好きになる人はあまりいないはずだ。

これが登山とロングトレイルを歩くことの大きな違いだと思う。登山は山頂を目指すことが目的であり、計画第一。標高が高くなれば高くなるほど環境も厳しく、危険度も高まるだけに、計画を遵守することが欠かせない。

でも、ロングトレイルは違う。垂直方向ではなく水平方向に旅するスタイルなので、山頂は目指さない。一方で、信越トレイルは全長80㎞あるため、その全行程を踏破することを目的とする人もいるが、僕は前述の通り寄り道ばかりだ。気になったものや町があれば、そっちを優先させる。予定調和ではなくハプニングを楽しむ。そうすることで、ロングトレイルを歩くことが『旅』になる。

信越トレイルには、まだまだ寄りたい場所がたくさんある。何度も訪れているが、そのたびに新たな発見がある。そして頻繁に計画を変更しては寄り道してしまう。だからいまだに80㎞を歩き切ることができていない。

でも、それでいいのだと思う。もし歩き切ることが目的になったら、それはもう旅ではなくなってしまう気がするからだ。きっと僕は、これからもずっと信越トレイルを歩き、楽しむことだろう。それは、終わりのない旅なのかもしれない。

深坂峠の石碑。奈良時代ごろから人々が行き来した歴史ある峠

柄山集落を歩く。山だけでなく里も楽しむのが、ロングトレイルの旅

ふたつの巡礼の道を歩く

熊野古道とサンティアゴ巡礼道

「持続可能」をキーワードに世界水準の観光地づくりを目指し、
「熊野はよみがえりの聖地、日本の再生のヒントが熊野にあります」
と発信されている多田稔子さんによる、トレイルを運営管理する側からのお話

多田稔子（田辺市熊野ツーリズムビューロー会長）

上：見晴台から望む熊野本宮大社旧社地・大斎原（おおゆのはら）の大鳥居と熊野の山々　下：熊野古道を歩く外国人旅行者

登録バブルがおこる

熊野古道は、平安時代に都の上皇貴族たちが熊野三山（熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社）を参詣した道です。江戸時代には、老若男女や身分を問わず「蟻の熊野詣で」と例えられるほど多くの人が歩きました。その後、熊野詣では衰退しますが、紀伊半島が開発されなかったことと林道や生活道として利用されてきたことで、千年前に歩いた山道が奇跡的にそのまま残ったのです。そして２００４年、高野・熊野・吉野という宗教の違うそれぞれの霊場を結ぶ参詣道として世界遺産登録されました。

登録直後は、狭い山中に１００台もの観光バスが訪れることもありました。いわゆる登録バブルです。しかし、ほんの少し歩くだけで次の目的地へと移動して行きます。これでは世界遺産の意味も熊野の本当の良さも理解してもらえるはずがありません。むしろ充分な魅力が感じられず不満が残るだけです。ブームで終わることが懸念されました。千年の歴史は、次の千年に引き継がれてこそ意味があります。発想を転換する必要を強く感じました。

美しい石畳が続く熊野古道

上・下：熊野古道女子部サンティアゴ巡礼
中：共通巡礼手帳

旅の上級者を呼び込む

単なる物見遊山ではなく、旅先の文化や歴史に親しみながら、ゆっくり歩く旅を楽しむ人たちに来てほしい。観光戦略をシフトし、目的意識を持って旅をする「旅の上級者」を呼び込みたいと考えたとき、欧米豪の個人旅行者はまさしくそのような存在でした。そこで、外国人を対象とする以上外国人の感性が必要だろうと考え、熊野が大好きなカナダ人男性をスタッフに招き、外からの視点による受け皿作りに着手しました。まずは看板やマップ、パンフレットなどに英語を併記することから始めました。例えば、大塔という地名を変換しようとしたとき、OOTO・OUTO・OHTOU・OTO など何種類もの表記が考えられます。また、熊野本宮大社に至っては19通りもの英訳が存在していました。一つひとつの固有名詞をどう英語表記するかを決めなくてはなりませんでした。同時に、「泊まる」「食べる」「移動する」など、個人旅行者には不可欠の基本情報を分かりやすく伝える必要もあります。表記を統一し、外国人視点に立った観光情報を蓄積してきました。こうした地道な積み重ねにより、玄関口である紀伊田辺駅周辺で外国人を見かけることが日常の風景となりました。バス待ちの列が全員外国人ということすら珍しくありません。

サンティアゴ巡礼道との共同プロモーション

熊野古道に歩く人を呼び込む観光プロモーションを始めて2年ほど経ったある日のこと、サンティアゴ・デ・コンポステーラ市の観光局が熊野古道を訪れました。そして、サンティアゴ巡礼道との共同プロモーションを提案されたのです。世界への扉が、さらに大きく開かれた瞬間です。

２０１５年からは両方の道を歩く、Dual Pilgrim 共通巡礼のプロジェクトがスタートしました。両方の巡礼道を完歩した人を共通巡礼者と認め、ピンバッチを進呈するというものです。わずか3年余りの間に、１５００人もの共通巡礼者が誕生しました。日本人だけではなく49か国もの人たちが達成しているのです。

今秋、熊野古道女子部（＊注）のメンバーがサンティアゴ巡礼を達成し共通巡礼者となりました。時には苦しい巡礼の旅を、それぞれのスタイルで楽しみ帰ってきました。その話を聞くにつけ、自分も共通巡礼者となりサンティアゴでピンバッチをもらいたいと思う気持ちが高まってきます。そして同時に、はじめてサンティアゴ・デ・コンポステーラを訪れた時の旧市街地の石畳を思い出します。言葉も肌の色も違う多種多様な人々が行き交い、遠い日本からの来訪者を温かく受入れてくれたあの路地を。

二つの巡礼の道は、共に「歩く人が巡礼の道の風景を完成させる」ことを知っています。「歩く人を大切にする」という信念を共有しながら、未来への遺産を受け継いでいきたいと願っています。

百間ぐら（熊野古道小雲取越）

（＊注）熊野古道女子部とは、熊野に興味を持つ女子で結成されたクラブ活動。部員は熊野エリア以外の女子に限り、現在約50名。地元はサポーターとして部活動を支援している。

世界自然遺産 奄美トレイル
Amami World Heritage Trail

「世界自然遺産 奄美トレイル」のチャレンジ

「世界自然遺産 奄美トレイル」の推進に取り組む奄美世界自然遺産登録推進室の前田尚大さんによる、島々を結びつける奄美トレイルの魅力、特徴、楽しみ方

前田尚大（鹿児島県環境林務部自然保護課奄美世界自然遺産登録推進室）

亜熱帯の一風変わったロングトレイル

皆さんは、ロングトレイルという言葉を聞くと、どのような光景を思い浮かべるだろうか。山々を縫う稜線の道や木漏れ日がそそぐ森の道、山の頂から見下ろすどこまでも続く道……そんな光景を思い浮かべる方も多いのではないだろうか。筆者もまた、北米等の世界的なロングトレイルのイメージからか、前述のような光景を想起していた。

実際に国内のロングトレイルに目を向けてみると、NPO法人日本ロングトレイル協会の加盟トレイルは、中部地方を中心とする山岳地帯周辺に設定されたトレイルの数が他に比べ群を抜いている。また、近年のトレイルランニング（この「トレイル」は基本的に登山道のような山岳地帯や森林の未舗装路を指すと思われる）の普及も、このようなイメージに寄与しているのかもしれない。

鹿児島県が奄美群島において順次ルート選定・開通を進めている「世界自然遺産 奄美トレイル」は、このようなイメージとは一風異なるロングトレイルである。島嶼のため、地平線を高地から見下ろすような景色は見られない。サンゴ礁が隆起して形成された島、すなわち喜界島や沖永良部島、与論島では、まとまった森林がほとんど存在しない。一方で、大陸から分岐して形成された島、すなわち奄美大島や徳之島に残る奥深い亜熱帯の照葉樹林にはハブが生息し、歩くには危険が伴う。そもそも、亜熱帯の島の夏は、日差しの強さ、湿度の高さにより徒歩の旅を快適に楽しめるとは言い難い。

地場の観光としても、もともと登山のような歩く旅は盛んではなく、マリンアクティビティが観光の中心となってきた（マラソン大会やトライアスロンは開催されている）。国内でも南西に位置し、数少ない（唯一かもしれない）離島に設定された奄美トレイルは、他には無い厳しい条件の下で設定を進めているトレイルと言えるかもしれない。

ウミガメとの出逢いもあるかも

サンゴで作られた石垣の小径をゆく

潮の満ち引きとサンゴが織りなす不思議な景観

冬はサトウキビの収穫の風景も楽しめる

新しいロングトレイル像へのチャレンジ

ここまで奄美トレイルに無いものばかり挙げてしまったが、このような厳しい条件下でロングトレイルを設定することは大きなチャレンジであるといえる。このチャレンジにはいったいどのような意味があるのだろうか。

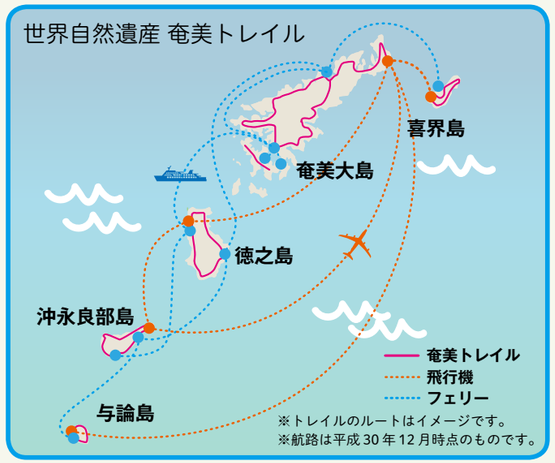
もちろん、奄美トレイルの第一の目的（地域目線での目的）は地域の持続的な活性化であり、奄美大島と徳之島が登録を目指す世界遺産効果の群島全体への波及、既存観光地への過度の集中の防止等の目的が掲げられている。しかしながら、この奄美トレイルのチャレンジは、国内におけるロングトレイルの発展を考える上でより大きな意味や役割を持ち得るのではないかと考えている。

例えば、奄美トレイルは、一般的に期待される（と思われる）ロングトレイルのイメージとは異なる、新たなロングトレイル像を創出できるのではないだろうか。エメラルドグリーンの海に浮かぶウミガメ、サンゴの枝で埋め尽くされた白い砂浜、無数に気根を伸ばした巨大なガジュマル、シダ類が鬱蒼と茂った照葉樹の森、サトウキビ畑の中を進むまっすぐな道、神様の通り道が大切に残された集落……他のトレイルでは見られない、奄美トレイルならではの光景はどれも美しい。

島から島への新しい楽しみ方

新たなロングトレイル像は、トレイル周辺の光景だけでなく、トレイルの楽しみ方にも及ぶ。先述の通りハブ等の安全面の観点から、奄美トレイルのルートは大部分が舗装された公道や農道である。登山道に慣れ親しんだ方には物足りなく感じられるかもしれないが、軽トラで通りかかる地域のおじさん、おばさん達と思いがけない交流が生まれるなど、ひと味違う楽しみ方ができるかもしれない。また、降雪の心配をせず身軽に歩ける環境は、冬期のトレッキング場所として特にライトなハイカーには魅力となり得るだろう。そして、島々を結ぶトレイルとして何よりもユニークなのは、島を一周したときの達成感である。海の彼方に浮かぶ次の島を見た時の興奮、飛行機や船で島から島へと渡り新たな島へ降り立つ時の高揚感は、他のトレイルでは得難いものだろう。

奄美トレイルのこうした可能性は、同時に日本のロングトレイルの裾野を広げ得るものだと考えている。ロングトレイルの裾野を広げ、「王道」のトレイルも含めてロングトレイル全体の利用人口を増やしていくためにも、少しでも多くの方に奄美トレイルを歩いて頂き、このチャレンジを応援して頂ければありがたい。



群島ならではの船で渡り歩く旅

ジョン・ミューア・トレイルの魅力

2004年からジョン・ミューア・トレイルを
毎年のように歩いている勝俣隆さんに、
その魅力を美しい写真とともに伝えていただいた

勝俣 隆（ハイカーズデポ）

標高 3630 メートルの峠まで続く「ゴールデン・ステアケース」と呼ばれるスイッチバック。JMT 上で一番の難所だ

カリフォルニア州東部にシエラネバダ山脈が640㎞にわたり南北に横たわる。その中心部を通る山道がジョン・ミューア・トレイル（以下、JMT）だ。北の始点はヨセミテ渓谷にある標高1220mのハッピーアイルから始まる。夏のヨセミテは、上高地のように賑わう観光地で、ハイカーたちは少しだけ居心地が悪い。トレイルはトゥオルミーメドウズまで一度北上し、あとは南下しながら、いくつものパス（峠）や谷を抜けて、合計340㎞を経て、南の始点、ホイットニー山に向かう。ホイットニー山はアラスカを除くアメリカ本土で一番の高さ4221mを誇る。頂上からの景色にこれ以上高い山はない。アメリカ国内でもJMTのスルーハイキングをバケット・リスト（死ぬまでにやりたいこと）に挙げるハイキング愛好家は多い。

馬やラバによる荷揚げサービスを行うパックトレイン。昔ながらの旅のスタイルだ

シエラネバダの美しい景観

JMTにはシエラネバダの環境保全に生涯を懸けたジョン・ミューアの名が冠されている。彼が会長を務めていたシエラクラブは、「ウィルダネス（原生自然）を歩いてこそ、環境保全の芽が育つ」と考え、シエラネバダ中心部のルートを開拓していた。1914年にミューアが他界すると、そのルートにミューアの名が冠され、翌年から敷設工事が開始。全線開通までに23年を要した難事業だった。当初の理念通り、トレイルはウィルダネスの中を抜けていく。全行程が国立公園と森林局の保護区の中にあり、レンジャーだけによって管理されているトレイルは類を見ない。

実際に歩いてみると、ほぼ2000～3000mの森林限界線近くを進む。途中のパスでは、富士山の標高を越えることもある。松や杉、モミなどの針葉樹の森を進み、高度を得るに連れて木々は消え、氷河の作った地形を進む。目に入るのは氷河が削った灰色の花崗岩でできた山々。岩山に張り付く白い氷河や雪渓。その下の蒼い氷河湖。雪解け水は小さな白い流れを作り、やがて渓流となると、その周りには青々とした草地ができ、インディアン・ペイントブラシやルピナス、シューティング・スターなどの野生の花々が彩りを加える。

ミューア峠にへと続く氷河湖エリアには灌木すらなくなる

野生動物も多い。マーモットやダグラス・リスが、わたしたちを見てみぬふりをして、彼らの日々の暮らしに勤しむ。臆病なブラウンベアは木々の隙間から顔だけ覗かせて、わたしたちハイカーを見張っている。小鳥たちは虫を探し、さえずるのに夢中だ。鹿たちは草を頬張るのに忙しく、ハイカーなんて構ってくれやしない。

夕照のカセドラル・ピーク。山火事の影響で一面の空がピンクに染まる

トレイルの歩きやすさ

ここ数年でJMTを歩くハイカーは増え続けている。入山許可の予約はいつも一杯だ。ハイカーが増えればトレイルへのインパクトも大きく、砂地の轍はあっという間に浸食されてゆく。そのせいもあり、付け替え工事が盛んに行われている。歩きにくい岩場は、砂利敷きや石造りのトレイルへと変わる。ウィルダネスとは程遠くなるが、歩きやすくこれ以上のインパクトはない。そしてハイカーの事故が減少すれば、歩く人は増えていく。

最近では、年配の女性をよく目にするようになった。マッチョな世界だったバックパッキングが変わりつつある。若いハイカーと異なり、足取りは緩やかかもしれない。しかし一歩一歩確実に進んでいく。追い越したはずが、休んでいるうちに抜かれてしまう。やがて言葉を交わすようになると、おしゃべりが楽しい。年配の方々はタフでたおやかだ。パスでは一緒に記念撮影をして、連絡先を交換する。「下山したら、我が家にも寄ってね」と誘われる。嬉しい。街ではあり得ないことがトレイルではよく起こる。同じ目標を目指すハイカーは絆が生まれやすい。そしてその絆は心強い。JMTが人を惹きつけるわけだ。

シエラネバダを歩いていると、わたしはちっぽけだと感じる。息を切らしてパスを登り、一息ついて後ろを振り返る。美しい景色が泰然と広がる。横ではマーモットが優雅に昼寝をしている。うらやましい。その場に留まりたくなる。歩くのがもったいない。一瞬でも、シエラネバダの景色の一点になりたくて、わたしは毎年のように歩いている。

北側で一番美しい湖のサウザンド・アイランド・レイクとバナーピークを眺められるキャンプ地

マーモットの日光浴。いつ餌をとっているのだろう

3644 メートルに位置するミューア峠に設置された避難小屋「ミューア・ハット」と天の川

イギリスの歩く道

大学院時代にイギリスで最も美しいとも称される
Cotswolds（コッツウォルズ）地域でインターンをし、
Rights of Way とナショナル・トレイルの管理運営について調査を行った
山本裕実子さんに、イギリスのトレイルの魅力について紹介いただいた

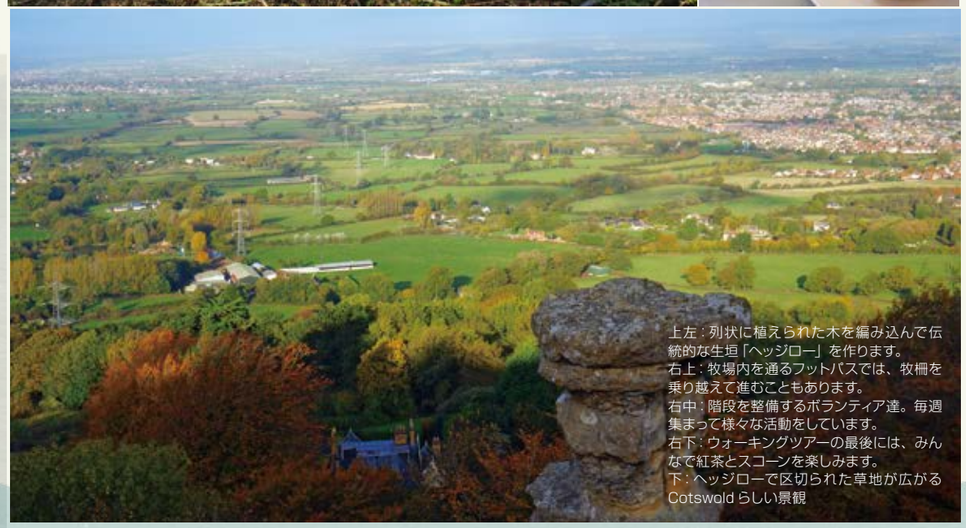
山本裕実子

ハイキングの楽しみ

イギリスにおいてウォーキングは主要なアクティビティのひとつであり、多くの人が毎日近所を散歩し、休日には家族や仲間と遠出してハイキングを楽しみます。また、各地でウォーキング団体が毎週のように様々なガイドツアーを企画しています。地形が平坦なので、険しい登山をすることなく長時間自然の中を歩くことができ、ウォーキング後にはみんなで村のカフェやパブでおしゃべりするというのも楽しみのひとつです。

誰もが歩く権利をもつ

このような活動は、自動車のための道路ネットワークとは別にイギリス全土に張り巡らされた歩道のネットワーク〝Rights of Way〟によって支えられています。Rights of Way は「誰もがそこを通行できる権利」を意味し、さらには「そのような権利の認められた道自体」のことも指します。特に、徒歩のみに利用されるものを「フットパス」といいます。Rights of Way の多くは、昔から人々が生活のために通行してきた道で、森や公園だけでなく、街中のビルの間、農場の中、個人庭の脇などいたるところに存在しています。地方自治体により Rights of Way として登録されると、たとえ土地所有者であっても通行止めにはできず、道を塞ぐように家を建てたりすることもできません。それどころか、草刈りや倒木の処理など道の維持管理が義務付けられています。また、すべての Rights of Way は一般的な地図に掲載され、ルート上には全国統一のサインタグも取り付けられるので、どこにあるかが誰でも簡単にわかるようになっています。このように、通行権が保障された道が網目状に存在しているおかげで、人々は安心して自由に歩きまわることができるのです。



上左：列状に植えられた木を編み込んで伝統的な生垣「ヘッジロー」を作ります。
右上：牧場内を通るフットパスでは、牧柵を乗り越えて進むこともあります。
右中：階段を整備するボランティア達。毎週集まって様々な活動をしています。
右下：ウォーキングツアーの最後には、みんなで紅茶とスコーンを楽しみます。
下：ヘッジローで区切られた草地が広がるCotswoldらしい景観

Cotswolds（コッツウォルズ）地域の魅力

さらに、長距離を歩くというレクリエーション利用のために、全国各地に既存の Rights of Way をつないだ長距離ウォーキングコースが作られました。２０１８年現在、そのうち16コースが「ナショナル・トレイル」として国に管理されています。ここでは、最も風光明媚なウォーキング道のひとつともいわれる〝Cotswold Way〟についてご紹介したいと思います。

イングランド南西部に位置する Cotswolds 地域は、13～15世紀に羊毛産業で栄えた丘陵地帯であり、ロンドンから車で２時間程度とアクセスもよいため、周辺都市だけでなく世界中から多くの人が訪れる観光地となっています。この Cotswolds 地域を南北に縦断する全長１６４㎞のトレイルが〝Cotswold Way〟です。１９５３年に地元のウォーキング愛好家によって設立が提案されたことをきっかけに整備され、１９７０年に開通。その後、２００７年にはナショナル・トレイルに指定されました。

Cotswold Way は、渓谷や高原、牧場や集落を通っており、カントリーサイドの雰囲気を楽しむことができます。牧場内を通るときには、牛や羊や馬がのんびりと草を食んでいる姿を眺めながら歩きます。また、小高い丘に登ると、ヘッジローと呼ばれる伝統的な生垣で区切られた放牧地や農地の中に、村や町が点在していることがわかります。どの集落にも地元で採れるはちみつ色のライムストーンでできた伝統的な建物や石積みの壁が並んでおり、今でも住宅やお店として大事に利用されています。

上：Rights of Way には、乗馬が可能なブライダルウェイという道もあります。下：人気のある運河沿いのフットパス

上：はちみつ色のライムストーンでできた石積みの壁 下：石積みの壁と家

Cotswolds 地域では、古くから残されている建造物や景観、利用しやすい歩道は重要な観光資源となっており、地元住民や飲食店などがイベントを開催するなどしてウォーキング客を歓迎することが、地域の経済的利益につながっています。そのため景観や歩道に対する地元住民の愛着や保全意識も高く、ヘッジローや石積みの壁のような伝統技術の継承や、清掃や階段の設置といった歩道の管理、ウォーキングツアーの開催には、地元のボランティアが大きな役割を担っています。国によって管理されているナショナル・トレイルでも、実際には、地方自治体や土地所有者、地元住民、民間事業者、ウォーキング愛好者、ボランティアなど、多様な主体がそれぞれ協力して管理されているのです。

＊　＊

「我々はトレイルを歩くことが大好きなんだ。」

私がイギリスでインタビューをしていると、何人かの住民からそのような言葉が返ってきました。人々に愛され、利用され、守られること。そのサイクルこそがトレイルにとって重要だと感じさせられました。

オーストラリアのトレイル、グレートオーシャンウォークにて（撮影 / シェルパ斉藤）

グリーンレター座談会

ロングトレイル 人と自然と出会う道

今回、特集にロングトレイルを取り上げたのは、2011年3月11日に発生した東日本大震災で大きな被害を受けた東北に新しい道がひらけたからです。

道の名前は「みちのく潮風トレイル」。

東北の復興を祈る気持ちでひらかれたこの道は、青森県八戸から福島県相馬までの震災を受けた地域の多くをカバーする長い長い道です。

座談会会場に設定した新宿御苑インフォメーションセンターのレクチャールームは、2011年10月、国立公園トーク・イベント（国立公園は自然の宝箱）として、日本のロングトレイルを育ててきた故・加藤則芳さんが講演され、当時、環境省自然環境局長であった本誌、渡辺編集長との鼎談もあった想い出の場所です。

7年がたち、ついに日本の本格的なロングトレイル「みちのく潮風トレイル」が開通するにあたって、あらためてこの場所でロングトレイルの魅力を語り合いました。

故・加藤則芳さん（信越トレイルクラブ提供）

木村宏
（北海道大学観光学高等研究センター特任教授／NPO法人日本ロングトレイル協会常務理事）

シェルパ斉藤（紀行作家／バックパッカー）

渡辺綱男
（本誌編集長／環境省自然環境局長を経て自然環境研究センター・国連大学勤務）

2018・10・10　新宿御苑インフォメーションセンター・レクチャールームにて

渡辺　来年2019年3月に、「みちのく潮風トレイル」が全線開通します。今日、お集まりいただいたお二方は、日本のロングトレイルの第一人者ですが、加藤則芳さんもまた、日本のロングトレイルを語る上でなくてはならない方です。彼は、震災の直後に「津波の大きな影響を受けた三陸で、生き生きとしたトレイルをつくることにチャレンジしてみませんか」と、環境省を訪ねて来られました。それが、みちのく潮風トレイルのはじまりでした。

加藤さんはご自身がALSという難病を発症しており、この病気はだんだん悪くなってしまうのだけど、応援するからぜひやってほしい、とおっしゃられました。環境省としても、国立公園でもある三陸で、地域の復興のために何ができるか考えていたところでした。

もちろん青森から福島までつなぐ、というのは簡単なことではありません。どうやったらできるだろうかと省内でも何度も議論して、私も4月に入って三陸をまわる機会があり、被災された方たちと話をして、震災の年の10月にこの会場で国立公園を考えるというシンポジウムを開催しました。そのときに加藤さんにいらしていただいてトレイルへの思いを語っていただいた。ここから三陸でのロングトレイルづくりが動きだしたのです。お二方のロングトレイルとの出会いは？

木村　私もロングトレイルとの出会いのきっかけは加藤則芳さんでした。僕は長野県の飯山市でグリーン・ツーリズムを推進するための施設を運営する立場にあって、その拠点となる体験型の宿泊施設の稼働率をどのようにあげていくかという課題を持っていました。

私は、公共施設であるこの宿の存続意義は、地域の人が求めていて、かつ旅行者も求めていることを一緒に楽しんでもらう仕組みを作り出すことだと考え、多くの人が見に来られるブナの巨木のある森を保全する活動をはじめました。地域と旅行者が一緒になって行う保全活動があることで地域の人たちが裏山に関心を寄せ、観光客と地域の人たちの交流を演出し、その活動を通じて多くの観光客が集まるだろうという作戦でした。

その記事が山と渓谷社の『outdoor』という雑誌に載ったんです。ある日、その記事を読んだというヒッピーのような人が訪ねてきた。それが加藤さんでした。そして、そのときはじめてロングトレイルという言葉を知ったのです。

斉藤　僕もその雑誌にトレイルのことを書いてます。1997年発行のその号は、確か特集に「ロングトレイル」を組んでいて、加藤則芳さんも僕も歩く旅の魅力を書いています。それが、ロングトレイルという言葉が世に出てきた最初じゃないですかね。

僕がロングトレイルを歩くようになったきっかけは仕事です。もう30年前になりますが、自転車でアジアを走る旅から帰ってきたところ小学館の『BE-PAL』に東海自然歩道という八王子と大阪・箕面を結ぶ全長1343㎞の長距離自然歩道の記事を書いてみないかと言われました。当時、海外のほうに目が向いていたので気乗りはしなかったのですが、仕事をもらえるならと引き受けました。それが意外に面白かった。歩けば、ネタがむこうからやってくる感じでした。地域の人との触れ合いがどこにでもあって、とても充実した旅になりました。

気仙沼市の海岸で地元の漁師さんとお話しされているのは、加藤則芳さんの弟さんの加藤正芳氏（撮影 / 茂木綾子）

加藤さんにいらしていただいて
トレイルへの思いを語っていただいた。
ここから三陸での
ロングトレイルづくりが動きだしたのです。　渡辺

2011年10月、国立公園トーク・イベントとして加藤則芳さんが講演され、当時、環境省自然環境局長であった渡辺編集長との鼎談が行われた（新宿御苑インフォメーションセンター）（環境省提供）

アパラチアン・トレイルでのヒアリング

アパラチアン・トレイル視察（2003年）。後列のいちばん左が加藤則芳さん、いちばん右が木村宏さん

「地域の人たちから
声があがるようなトレイル」を
つくりたいという
加藤さんの言葉も
よみがえってきました。 木村

故・加藤則芳さん（信越トレイルクラブ提供）

そのあと30代は日本や世界の各地をバイクやヒッチハイク、自転車でまわり、耕うん機で北海道から波照間まで4年3ヶ月かけての日本縦断が終わった2002年、40代は自分の足で歩こうと決意しました。そんな矢先、担当編集者がアメリカからこんな雑誌がありますよと持って帰ってくれたのが『ブルー』というアウトドア系の旅行雑誌でした。そのなかに「ザ・ワールド・ベスト7トレイルズ」と題した特集記事が組まれていて、それを見たらそのトレイルをすべて歩いてみたくなった。無性に行きたくなってしまった。仕事ではなく自主的に歩き始めて、最終的には『シェルパ斉藤の世界10大トレイル紀行』という本も出しました。

渡辺　加藤則芳さんは、アメリカのアパラチアン・トレイルを歩いて『メインの森をめざして―アパラチアン・トレイル3500キロを歩く』という本を出されていますね。お二方とも歩かれたことありますか？

木村　2003年に、加藤則芳さんと一緒にアパラチアン・トレイルの視察に行きました。そしてアメリカ政府の機関や企業から話を聞いて、ハイカーとの関わり方を見てきました。しかし実際歩いたのは3㎞ぐらい（笑）。

そのときにいちばん印象に残ったのが、森林管理署や環境省のレンジャーもボランティアの人たちと一緒に汗を流してトレイルメンテナンスの活動をしていたことでした。日本では見たことのない光景だったのでインタビューしていかと聞いたら、「いいけど、おまえらも手伝え」と。先ずは汗を一緒に流しましょうということ。はあ、こういうふうにしていかなきゃいけないなと、強く思いました。

斉藤　アパラチアン・トレイルは全行程が3500㎞なので、毎日20㎞以上歩いても踏破に半年もかかります。それで加藤さんにアクセスの良いお勧めのルートを教えてもらい、ニューヨークからバスで行って、バスで帰ってこられる100マイルほどを1週間ぐらいで歩きました。そのうち2泊は、トレイル・エンジェルと呼ばれる地元のボランティアの家に泊めてもらって、ベッドやシャワー、洗濯、夕食も朝食も提供していただきました。遠慮する僕に「シェルパは遠い日本からアパラチアンにやってきた友人なんだから遠慮するな」と歓迎してくれた。胸がいっぱいになりました。個人的に好きでやっている、そういう人たちがいるというのは知ってはいましたが、感動的でしたね。

渡辺　木村さんが理事をされているNPO法人信越トレイルクラブが管理する「信越トレイル」は、アパラチアン・トレイルをお手本として、2001年に整備が始まり、2008年に全線80㎞が開通しました。開通後10年やっていらして、いかがでしょうか。

木村　加藤さんがよく言っていたのは、システマティックな管理体制をしっかりつくることで次の世代にトレイルが残せると。事務局と地域の人との関わり方が、10年経つことで深くなってきて、システムとしてもできあがってきているなと感じますね。最初は「通達がないとできません」といっていたような市町村も、今では必然としてやってくださるようになってきました。仕組みをつくってそれを動かしていくということを試行錯誤しながらやってきた10年ではありましたが、それなりに地域がともに守り伝えるという意識ができてきたなあと思います。

渡辺　信越トレイルは国内のロングトレイルのパイオニアであり、成功したトレイルとして取り上げられることが多いですね。みちのく潮風トレイルもたくさんの人が来るようになるといいですね。

木村　加藤さんが2013年に亡くなられてしまったので、その思いを語り継ぐ人が必要だと思ってみちのく潮風トレイルに関わらせていただいてきました。まもなく全線開通というところまで来た、と感慨深いです。当初は、みちのく潮風トレイルは線を引いただけでなかなかうまくいかないよ、という声も聞きましたし、それを聞くにつれ「地域の人たちから声があがるようなトレイル」をつくりたいという加藤さんの言葉もよみがえってきました。ただ、現地に行くと、まだまだこのトレイルのことを知らない人も多くて、どうしたら地域のみなさんと一緒に思いを結実させることができるかが課題です。

斉藤　もっと仕掛けていかなくてはだめでしょうね。今までなかったのだから地域の人が知らないのは当然。知ってもらうためにはアイデアを出して、それをどんどん実現していかないと発展していきません。

ここが被災した土地で、東北の被災地をつないでいるトレイルだということも前面に出すべきでしょう。歩く方は、被災地の役に立ちたいという思いも強くもっているはず。その思いを積極的に受け入れてくれるような仕掛けがあってもいいと思います。

四国のお遍路道は舗装路ばっかりで歩いていて楽しくないけれど、それでも多くの人が歩くのは、お参りの道だから。スペインの※サンチアゴも人が集まるのは、あそこが巡礼の道だから。みちのく潮風トレイルは被災地だから、ところどころにお祈りができる場所があってもいい、巡礼の意味合いを持たせたほうがいいと僕は思います。

それと、地元の人に歩いてもらうためにも、たとえば県知事や市町村長がリレー形式で、歩いたらいいと思います。自分のところにどんなトレイルがあるか知ることができるし、ニュースにもなるし、バトンを渡されたら次の首長は歩かないわけにはいかないしね。実は、地方の人は地元の道をあまり歩かないんですよ。歩くきっかけがあると、地元がもっと好きになるはずなのに。

木村　聞くところによると、日本各地のロングトレイルを海外の人が歩き始めているそうです。ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアなどから歩く文化をもった旅慣れた人がこれからどんどん増えてくる。そうなってくればナショナルトレイルとしてみちのく潮風トレイルは、ロングトレイルの代表格になってくると思うんです。

斉藤　なおさら復興の道だというのをもっとアピールしていいと思います。それを海外から来た人たちがSNSで発信してくれれば、歩きたいという人はぐっと増えると思います。

木村　ブログなんかを見ていると、みちのく潮風トレイルの近くに住んでいる人たちが、ハイカーに声をかけてくれるらしいんです。

テントはトレイルを自由に旅するうえで最強の宿でもある（撮影／シェルパ斉藤）

名物おじさん、おばさんにも会いたいです。
絶景のトレイルも素晴らしいですが、
いちばん印象に残るのは、
そこにどんな人がいて、
こんなことがあったぞという記憶ですから。 斉藤

加藤則芳さんに伝授された100マイルのアパラチアン・トレイルを歩く（撮影／シェルパ斉藤）

※世界遺産に登録されているサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路

サンチアゴのシンボル、ホタテ

宮城県名取市でのワークショップ（2016年）

斉藤　東北の場合、慣れ慣れしく話しかけてはこないけど、こっちから話しかければ歓迎してくれます。外国人の方がわざわざ遠くから来て歩いてくれたら、地元の方は嬉しいし、自分の土地を誇りに感じると思います。歩く人も受け入れる地元の方も、相乗効果でよい方向に高まるようにしなくちゃ。日本中にこれだけトレイルがあっても、全部が盛り上がっているわけではないですもんね。それは地元の意識の違いかなという感じもします。

木村　何かトレイルのシンボルになるものも欲しいですね。サンチアゴのホタテのような。三陸もホタテが産地だから、あれをまねしてもいいんじゃないですか。

斉藤　世界のトレイルと同じマークだというのもいいですね。

木村　それを自分ちの軒先にちょっと置くようになったとき、はじめて地域の人たちが文化として育んでいくようになるのでしょうね。

斉藤　あと、名物おじさん、おばさんにも会いたいです。絶景のトレイルも素晴らしいですが、いちばん印象に残るのは、そこにどんな人がいて、こんなことがあったぞという記憶ですから。人とのふれあいというのは大きい魅力です。

　コースは忠実に歩く必要はありません。日本人はまじめだからルートがあるとその通りに、と思うかもしれませんが、自分で考えてルートを変更するのもありですから。それならもっと気楽に出かけられる。とにかく来てもらう。そして地元の方に知ってもらう。その2点がないと結局、線を引いただけになっちゃう。来年オープンするのなら、ここががんばりどころかと思いますよ。でも、ほんとうにたいへんだと思いますよ。何もないところからシステムをつくって、しかも被災地で…。道路もまだ復興していないところもありますし…。

木村　今までの日本のトレイルは、関連性のある地域の中で線をひいた100km前後の慣も自然状況も違う。そんななかでつながるというのはロングトレイルの神髄だと思うんです。だからこそ日本を代表するナショナルトレイルだと思うし、この意味を地域の人たちがちゃんと理解したときに文化になる。そこまで目指したいと思います。斉藤さんがお書きになった『世界10大トレイル』の本では11番目に数えられるのではないでしょうかね。

斉藤　そうなったらいいですね。

渡辺　加藤さんは、自然が大事というだけじゃ伝わらない。歩いて感じる人が増えることが、自然を大事にすることにつながると言っておられました。加藤さんとお話した会場で、木村さん、斉藤さんから、とても大切な宝ものとなるお話を聞かせていただいたと感じています。本当にありがとうございました。

みちのく潮風トレイルは
おおむね1000kmあるので、
文化も生活習慣も自然状況も違う。
そんななかでつながるというのは
ロングトレイルの神髄だと思うんです。　木村

みちのく潮風トレイルを歩く。加藤則芳氏の弟さんの加藤正芳氏（撮影 / 茂木綾子）

トレッキングルートだから、ある程度同じ文化圏で、育まれているところがあります。でも、このみちのく潮風トレイルはおおむね1000kmあるので、文化も生活習

みちのく潮風トレイル縦断ミニフォーラムでのパネルディスカッションのようす。木村さんと斉藤さんのお顔が見える（2017年2月1日）

FGF通信

2018年度、公益信託富士フイルム・グリーンファンド（以下、「FGF」とする）は、次の4つの事業を展開いたしました。これからも自然環境の保全に役立つ幅広い事業を各方面のご協力をいただきながら進めていく所存です。一層のご支援をお願いいたします。

■自主的な事業

❶未来のための森づくり

都市近郊の緑地を活動対象として選び、自然とふれあうことのできる森づくりを目指した活動に長期的な視点で助成しています。現在は第4期の活動が進行中です。

❷緑のための支援事業

より多くの人々にFGFへの理解を深めていただくために、写真展やシンポジウムなど、さまざまな活動をしてきました。「自然観察路コンクールは」は1984年から実施しています。

■助成事業

❸緑とふれあいの活動助成

❹緑の保全と活用の研究助成

1年間、もしくは2年間の身近な自然とのふれあい活動や自然環境保全のための調査研究に対する助成です。毎年、8件前後の助成を実施しています。

■自主的な事業

❶未来のための森づくり

第4期 エゾリスの会による「帯広の森　里山づくり」

本年度は2016年度にマスタープランを作成し、2017年度から4ヶ月年計画で森づくりを開始したエゾリスの会（北海道帯広市）の、2年目の活動について助成しました。

今年度の活動は、外来種駆除のための表土の剥ぎ取り試験後のモニタリング調査と、在来種を増やすため秋に種子を採取し、育苗する方法を検討しています。また、自然林再生エリアにおける樹木の管理作業および自然林再生過程のモニタリングを実施しており、この地域の象徴となる植物を40種選定し、それら40種が自然の湖畔林の割合とどの様に異なるかを把握し、今後どの様に変化していくかを観察しています。

昨年移設した観察小屋を活用しながら地域住民を対象とした観察会を実施し、観察小屋内部から観察できる巣箱を外壁に設置しました。今年度中に簡易トイレを設置し、より滞在時間の長い作業や観察会を実施できる体制を整えていきます。

種子の採取のようす

観察小屋周辺での観察会

■助成事業

❸緑とふれあいの活動助成
❹緑の保全と活用の研究助成

第35回を迎えた2018年度のFGF助成は、3月から公募を開始し、5月7日（月）に募集を締め切りました。応募件数は、活動助成に39件、研究助成に58件、合計97件となりました。

運営委員会での審査の結果、本年度は活動助成4件、研究助成5件の計9件が助成対象に決定されました。（27ページ参照）

今回、助成に選ばれた方々、惜しくも選ばれなかった方々に、この場をお借りして御礼を申し上げます。来年度も自然環境の保全のために活躍している多くの方々からのご応募をお待ちしています。

●活動助成応募内訳

森林を場とした活動	14件
里山を場とした活動	14件
田畑・農村環境を場とした活動	1件
河川・海域・池・湖沼を場とした活動	10件
その他	0件

●研究助成応募内訳

動物（生態系）の基礎的な調査・研究	40件
緑地の効用・保全に関するもの	12件
その他	6件

★ 第 35 回 わたしの自然観察路コンクール　環境大臣賞・優秀賞作品

賞	作品タイトル	氏名	学校名	学年	都道府県
小学生の部 環境大臣賞	おいしいざっそう みーつけたマップ	稲垣 典寛	光輝学園つくば市立 松代小学校	1年	茨城県
〃 優秀賞	ぼくの新しい通学路 わくわく発見マップ	瀬戸 総太	大田区立久原小学校	5年	東京都
〃 優秀賞	ぼくのたんけん MAP	井漕 正博	関西創価小学校	3年	大阪府
〃 優秀賞	京都・深草の朝と 夜の自ぜんマップ	田中 広城	関西創価小学校	3年	大阪府
中学生の部 環境大臣賞	小学校までのみちくさ道 ～猛暑に勝るみどりの元気～	秋山 凜	明治大学附属 中野八王子中学校	2年	東京都
〃 優秀賞	加西のガラパゴス あびき湿原 NATURAL ROAD	中井 一成	淳心学院中学校	1年	兵庫県
〃 優秀賞	都会の私と田舎の私 ～小川町を歩いてみたら～	三宅 結菜	明治大学附属 中野八王子中学校	1年	東京都
高校生の部 優秀賞	緑と野鳥に出会える 「高舘いこいの森」	板橋 祐稀子	宮城県農業高等学校	3年	宮城県
〃 優秀賞	どうめきと僕の 11 年間 ～きのこ・変形菌編～	黒﨑 裕貴	和歌山県立 田辺高等学校	2年	和歌山県
〃 優秀賞	員弁の道を歩む	奥田 愛矢	関西創価高等学校	1年	大阪府

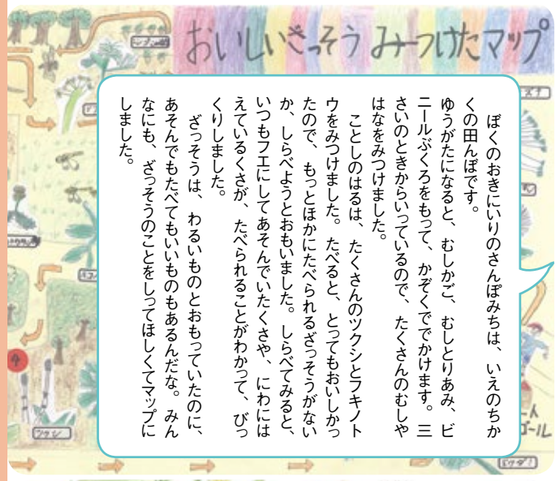
■ 自主的な事業

❷ 緑のための支援事業
第 35 回 わたしの自然観察路コンクール

全国の小・中・高校生を対象に、身近な自然観察路を絵地図と解説文で紹介してもらうことによって、次代を担う子どもたちの自然に関する意識の高揚を図ることを目的に実施しました。

第35回になる２０１８年度は、小学生の部１３１件、中学生の部２１２件、高校生の部１５６件、団体の部15件、計５１４件の応募があり、環境大臣賞の２件を含め、計28件の優秀作品を表彰しました。

ここでは環境大臣賞を受賞した小学生の部と中学生の部の作品をご紹介します。地図中の各ポイント紹介などや過去の受賞作品などの詳細は、公益社団法人日本環境教育フォーラムのｗｅｂをご覧ください。
http://kansatsuro.jeef.or.jp/

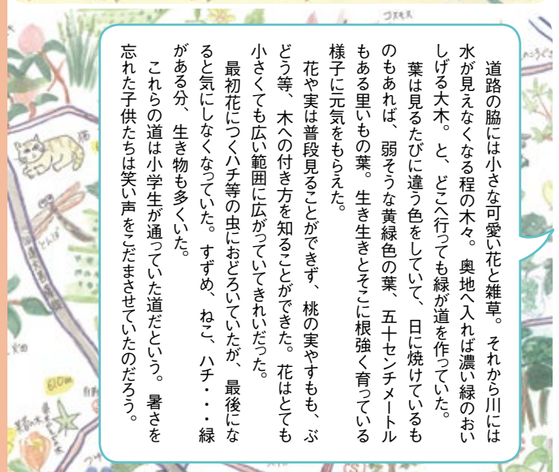


ぼくのおきにいりのさんぽみちは、いえのちかくの田んぼです。

ゆうがたになると、むしかご、むしとりあみ、ビニールぶくろをもって、かぞくででかけます。三さいのときからいっているので、たくさんのむしやはなをみつけました。

ことしのはるは、たくさんのツクシとフキノトウをみつけました。たべると、とってもおいしかったので、もっとほかにたべられるざっそうがないか、しらべようとおもいました。しらべてみると、いつもフエにしてあそんでいたくさや、にわにはえているくさが、たべられることがわかって、びっくりしました。

ざっそうは、わるいものとおもっていたのに、あそんでもたべてもいいものもあるんだな。みんなにも、ざっそうのことをしってほしくてマップにしました。



道路の脇には小さな可愛い花と雑草。それから川には水が見えなくなる程の木々。奥地へ入れば濃い緑のおいしげる大木。と、どこへ行っても緑が道を作っていた。

葉は見るたびに違う色をしていて、日に焼けているものもあれば、弱そうな黄緑色の葉、五十センチメートルもある里いもの葉。生き生きとそこに根強く育っている様子に元気をもらえた。

花や実は普段見ることができず、桃の実やすもも、ぶどう等、木への付き方を知ることができた。花はとても小さくても広い範囲に広がっていてきれいだった。

最初花につくハチ等の虫におどろいていたが、最後になると気にしなくなっていた。すずめ、ねこ、ハチ・・・緑がある分、生き物も多くいた。

これらの道は小学生が通っていた道だという。暑さを忘れた子供たちは笑い声をこだまさせていたのだろう。

■ 環境大臣賞 小学生の部「おいしいざっそう みーつけたマップ」
稲垣典寛さん（光輝学園つくば市立松代小学校 1 年）

★★ 審査員の評価 ★★

- キジの絵などはまさに小学 1 年生の絵で、特徴をとらえて一生懸命描いたんだなと伝わってくる
- いろんな人から話を聞いたことを率直に自分の言葉で書いていてたいへん良かった

■ 環境大臣賞 中学生の部「小学校までのみちくさ道　～猛暑に勝るみどりの元気～」
秋山 凜（明治大学付属中野八王子中学校 2 年）

★★ 審査員の評価 ★★

- 文学的な香りのする説明文が良かった
- 植物のスケッチが上手
- 標高を示すことにより植物等の生息地を他の作品にはない視点で捉えようと工夫している

審査員の方々

左手前から、小林光氏（公益信託富士フイルム・グリーンファンド運営委員長）、井上和也氏（環境省）、執行昭彦氏（(一社) 日本空間デザイン協会）、瀬尾隆史氏（(公社) 日本環境教育フォーラム）、星野俊彦氏（富士フイルムホールディングス（株））、守随吉弘氏（三井住友信託銀行（株））

2018 年度の助成先が決定しました

■ 緑とふれあいの活動助成

大人も子どもも楽しく安全に自然体験が楽しめるガイアの森づくり
NPO 法人ガイア自然学校とやま　富山県

遊歩道などのフィールド整備のために、自分たちの手で未整備の竹林の伐採や草刈りなどを行う。また拠点となる母屋の建設なども実施することにより、地域の多くの子どもたちに自然体験を通した環境教育の機会を提供する活動。

森林整備の様子

■ 緑とふれあいの活動助成

みちのく潮風トレイル利用促進のための歩行データの調査・研究
特定非営利活動法人みちのくトレイルクラブ　宮城県

東北沿岸部の里山里海資源を活かしたグリーン復興プロジェクトの一環として国と地域との協働により計画、整備が進められている「みちのく潮風トレイル」を対象に、民間サイドからの利用の促進、利用の質の向上を図る活動。

トレイルを歩く

■ 緑とふれあいの活動助成

豊北の水と生態系の研究・下関北高協同 ～粟野川流域図作成を原点に～
北高夢ロード実行委員会　山口県

地域の未来を担う高校生をはじめとする若い世代が、地域の伝統的な産業である青のり栽培やシロウオ漁の振興のために粟野川の水質を調査する。これらの自然保護活動を通して、次世代の人材を育成する活動。

粟野川流域調査で住民の方にヒヤリングする

■ 緑とふれあいの活動助成

海岸の自然観察を通じてマイクロプラスチックの危険性を学ぶ
特定非営利活動法人 サンクチュアリエヌピーオー　静岡県

単なる海岸清掃ではなく、マイクロスコープなどを使用して、魚の胃内に溜まったマイクロプラスチックゴミを観察することで、自然や野生動物の保護のためにとるべき行動を普及啓発することを目的とする。

海岸でのマイクロプラスチック探し

■ 緑の保全と活用の研究助成

伊豆諸島青ヶ島の絶滅危惧種が生育する噴気孔原群落の保全にむけた基礎研究
上條隆志（筑波大学）　東京都青ヶ島

日本の絶滅危惧植物のなかには特殊な環境にのみ生育する植物があり、これらの保全方法が求められているなか、青ヶ島噴気孔群落に生息するサクラジマハナヤスリ、チャボハナヤスリの保全方法を見つける。

地温が高いため特色のある植物がごくまばらに生育している

■ 緑の保全と活用の研究助成

天然記念物ミヤコタナゴの再導入等の候補地の探索および生息域の再生手法の検討
鈴木規慈（三重大学大学院）　千葉県

絶滅危惧種の保全において、重要な再導入の候補種を環境 DNA 分析により絞り込む試み。地元の研究者やミヤコタナゴ保存会の協力を得て、基礎調査を実施し、生息環境の調査と合わせて総合的な検討を行う。

ミヤコタナゴの繁殖に不可欠な淡水二枚貝

■ 緑の保全と活用の研究助成

網走市こまば木のひろばにおけるエゾモモンガの生態調査
後藤ひとみ（東京農業大学）　北海道

外部から閉ざされている狭い地域に生息するエゾモモンガを対象に、テレメトリー調査によって生態を調査し、最終的には行政機関へ科学的根拠をもった保護政策の提案を行い、エゾモモンガの保護を進める。

試験的に取り付けた捕獲調査のためのワナ

■ 緑の保全と活用の研究助成

巨樹・名木とそれを取り巻く地域社会における生態系サービス及び Eco-DRR 機能の定量的評価
宇野宏司（神戸市立工業高等専門学校）　兵庫県

樹齢千年を超える巨樹が残存している理由を実態把握と空間情報解析などの定量的な調査により解明することで、その周辺環境がもたらす生態系サービスの効用と生態的防減災法を見出そうとする提案。

都市河川の環境・生物多様性に関する調査

■ 緑の保全と活用の研究助成

岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発
島田直明（岩手県立大学）　岩手県

東日本大震災後の砂浜の変化に着目し、地元の小中学校の環境教育プログラムとして海浜植物の栽培と移植をするプログラムの作成と応用の提案。地域住民と協力しながら研究を継続し、現実的な環境教育の実践を目標にしている。

東日本大震災後の砂浜で活動する子どもたち

2017年度　助成先の紹介

2017年度のFGF助成先は、活動助成が5件、研究助成が3件でした。
活動・研究の成果をご報告していただきました。

活動助成

林内の遊具で遊ぶ子どもたち

ヒノキの間伐作業

女川学びの森の整備と利活用促進

青砥祐信（NPO法人女川ネイチャーガイド協会） 宮城県

私たちの町女川は面積の8割強が山林で占められています。私たちは、この山林を対象に、山林環境の保全及び、山林資源に対しての認識共有化を目標に活動を続けています。しかし、現状は約半分が30～40年前に植栽された杉とヒノキの人工林で、それも植栽後ほとんど手が入っていない密植放置状態となっていて、早急な間伐が必要となっています。

そこで、私たちは間伐促進を目的に町有林（1・5ｈａ）を使用させてもらい、そこを「女川学びの森」と名付け、町民に声掛けして「安全な伐倒方法」「チェーンソーの取扱い」などの林業の初歩技術の教育実習を経て間伐作業を開始しましたが、作業が進めば進むほどに発生する間伐材の処置に悩まされるようになりました。そんな時、「富士フイルム・グリーンファンド」の助成を受けて、間伐材を使って林内で子どもたちが楽しく遊べる遊具の製作と設置を実施することができました。

完成後、より安全性を見極めるため、約20組の親子を呼んで試してもらいました。その評価は上々で、スタッフ一同に笑顔がうかびました。子どもたちの遊びを見ていると、遊具はもとより、そばに転がっている長丸太を平均台にしたり、短い玉切り材を転がしたり、円盤状の端材を投げ合ったりと林内の身近なもので嬉々として遊んでいます。その姿から、子どもたちにとっては、仮想空間より現実空間がいかに自らの着想と工夫を育むものかと、改めて学ばせてもらった気がします。

完成したウッドデッキに記されたFGFロゴ

活動助成

近隣小学校と共催で行ったプロの林業家による森林整備体験

車いすが通れる新しい林道

里山を活かしたこどもの遊び場と大人のコミュニティスペース

青木薫（土沢森あそびの会） 神奈川県

富士山麓の山中湖や忍野八海を源とする相模川が、相模原の台地に流れ出そうとする場所、串川丘陵の最も東側にあるのが土沢の森です。一帯は集落に近い里山として人々の暮らしを支えてきました。昨今、水源涵養、憩いの森としての整備、利用が進められ、地域をはじめ近郊の人々の憩いの場としての役割が高まっています。

当会は【森をつなぐ（継ぐ）、森でつながる（繋がる）】をコンセプトに、子どもの自由な外あそびの場、大人がリフレッシュできる場、多様な人々が交流できる場として森を活用し、手入れをしながら次世代に残すことを目的に2011年より活動を行っています。

間伐材の遊具などで自由に遊べる「森で遊ぼう」の開催（毎月）、林業家による「森林整備体験教室」、小学校の授業や自主保育グループへ場の提供、就労支援実習生受け入れやコンサート開催など、これまで延べ2000名以上が森を訪れています。また、定期的な間伐や下草刈りによって林床が明るくなり山野草も数を増やしています。

助成金で整備した林道により、肢体不自由児サークルが車イスで森を訪れ、参加者から「心地よく五感を刺激する森は療育にも効果的」との声をいただきました。この林道を活用し、ベビーカーや高齢者など幅広い年齢層の参加や間伐材の活用にもつなげていきます。また、整備を継続することで、市博物館学芸員より「あるべき場所にきちんとある」と評された山野草など在来の生き物が今後も生息できる森を維持していきます。

活動助成

鹿のさばき体験教室

収穫祭の様子

子どもたちによる里山再生プロジェクト 南アルプスユネスコエコパーク内での獣害につよい畑づくり

加藤博（南アルプス子どもの村中学校） 山梨県

南アルプス市築山地区の高台には、過疎化の影響で人は誰も住んでいません。スモモを育てる農家の往来はありますが、夜は無人の集落です。耕作放棄地も多く、昼はサルの群れが襲来し、夜になるとイノシシ、シカなどが多数出没し、果樹を荒らしていきます。

近くの人々は畑仕事を生きがいにされていますが、育てた花や作物をけものに荒らされ、すっかりやる気をなくしています。住人は街に下り、人のいなくなった里山は荒れる一方でした。

その土地に畑をかり野菜づくりを進めました。地元の人が収穫は見込めないと忠告された土地です。集落環境診断、センサーカメラによる観察、電気柵の設置、ヒヤリング調査を通して、けもの被害の防除に挑戦しました。サルを餌でおびき寄せ、電気柵に触れると感電すると学習させると、その成果があってか、その後、近づかないようになりました。

また「こどもけもの学校」を開催しています。動物の痕跡調査・サツマイモの苗づけ、シカのナイトセンサス、収穫祭、シカのさばき方教室には多くの親子が参加し、一緒に楽しみました。その内容はSNSを利用して発信し、市民活動センターにおいて発表しています。一連の仕事は、NHK甲府放送局製作「けもの撃退大作戦」として、ドキュメンタリー番組になり放映されています。

南アルプスユネスコエコパークの自然を専門家から学び、過疎化が進行する現代社会の問題点に着目し、環境循環型社会のあり方にまで学習は発展しています。この内容は「子どもの村中学校の自然と人のくらしの大図鑑」としてまとめ、発行することを目指しています。

活動助成

活動拠点の皆志寮前で集合写真

小川で生き物観察

豊田市の中山間地を舞台とした多世代参加型の自然とのふれあい活動

佐藤雄哉（豊田工業高等専門学校） 愛知県

豊田工業高等専門学校の学生と教職員の有志による『豊田高専ドミタウン実行委員会』の活動は4年目を迎えました。ドミタウンとは『学寮（ドミトリー）の仕組みを取り入れ、多世代交流によってつくられるまち（タウン）』のことです。本活動は、多世代が中山間地域で自然にふれあう活動を通して、中山間地・里山の維持・保全が重要な課題であることを楽しみながら認識してもらうことを狙いとしています。

豊田市笹戸町内の空き旅館「皆志寮（かいしりょう）」を活動拠点として、学生、教職員、地域住民の方々、豊田市内の小学生たちが一つになって、休耕地を活用した稲作や畑作、小川での生き物観察などに取り組んできました。4月には、休耕地を活用した野菜の作付けを、6月には雨が降る中、小学生とともに泥だらけになりながら休耕田で田植えを行いました。また、8月には4月に休耕地に植えた野菜などを収穫し、皆志寮近くの小川で生き物観察をしました。9月には6月に休耕田に植えた稲を刈りました。

ドミタウン実行委員会のFacebookページ（https://www.facebook.com/dormitown/）では、詳しい活動内容を随時更新しています。今後も継続して、中山間地の自然に多世代が触れ合える機会を提供できればと考えています。

最後になりましたが、本活動では地域の皆様をはじめ、ご支援をいただきました富士フイルム・グリーンファンド様など、多方面の皆様から多大なご支援とご協力をいただいております。心より深く御礼申し上げます。

2017年度 助成事業

活動助成

東京藝術大学上野キャンパスにおける武蔵野の植生再生と維持の活動

清水泰博・君塚和香（東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室）東京都

「藝大ヘッジ」植樹ワークショップの様子

活動場所と経緯

上野公園に隣接した本学キャンパスは、前身の東京美術学校と東京音楽学校が置かれてから130年になります。その中にあって先人が大切に残してきた武蔵野の面影を残す古い森の保全がこの活動のスタートでした。常緑樹や侵略的外来種が勢力を伸ばしていた暗い極相林を、明るく多様性のある森へと緩やかに移行させる植樹プロジェクトを3ヵ年に渡り実施、その森を維持管理するとともに、新たに武蔵野の植生を増やす活動として大学沿道での「藝大ヘッジ」に取り組んでいます。

助成金による活動

◆ **森の維持管理資機材の充実**：学生有志による「お世話隊」の維持管理活動に必要なリヤカーや剪定道具などを購入。

◆ **「藝大ヘッジ」の拡大**：大学の外周部の閉鎖的な鉄柵を撤去し緑の灌木による柔らかな境界を段階的にかたちづくる取り組みの第三弾を実施。落葉・常緑を織り交ぜた武蔵野の植生30種ほどの苗木による混植の生垣をデザインし、学生・教職員・本学OBOGなどの関係者、一般の方々による植樹ワークショップを実施しました。

◆ **藝大生による「藝大の森図鑑」**：取り掛かりとして森にある樹木から選んだいくつかの対象樹を学生各々がそれぞれの目線で捉え表現することを試みました。同じモチーフに対しての表現を比較してみることで多角的な視点が得られます。こうした植物に触れ観察することが学生の創作への刺激にもなります。

◆ **森の3Dレーザースキャン**：複雑な樹形や地形を最新の機材を用いてデジタル化。現状を記録するとともに、全体像を俯瞰して掴み、PC画面の中で森の中を飛び回れるようなデータを取得。今後の成長や変化を見る際のベースとして活用します。

◆ 今後の展開

これら緑の環境を保全する活動を通して大学全体が地域とゆるやかにつながり開かれたものとなっていく効果を感じています。始まったばかりのこの取り組みは学生、教職員ら有志による選択的除草・水遣り・刈込みなどの活動を継続しており、一年を通じて花や実や紅葉、新緑など様々な季節の表情を感じる場所として維持していくとともに、「藝大ヘッジ」を段階的に延伸してさらに充実した環境をつくっていきたいと考えています。

研究助成

ニホンイシガメの保全を目的とした生活史の解明

小賀野大一（東邦大学理学部地理生態学研究室）千葉県

水田で確認した電波発信機を装着したイシガメ雌

浅い水場をよく利用するイシガメの幼体

ニホンイシガメは本州、四国、九州に生息する日本固有のカメで、太平洋側では関東地方がその北限にあたる。千葉県北部に残る里山には僅かではあるがイシガメの生息地が残されており、北限域にあたるこの地の一角で保全を目的とする生態調査を実施してきた。イシガメは全国各地で環境悪化により個体数が減少し絶滅の危機が指摘されているが、保全に向けての生態学的な基礎研究は十分とはいえなかった。特に、保全上重要な繁殖や幼体に関する詳細な生態が不明であったため、これらを含めた生活史の解明を研究目的にした。

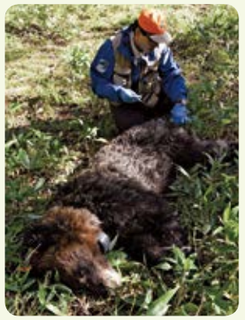
イシガメの標識再捕獲や成体雌に電波発信器を装着し行動を追跡したことで、産卵場所の特徴や孵化後の幼体の生息環境や行動圏が明らかになってきた。産卵場所は水田の畦や農道ではなく、より離れた畑や園芸用ハウス、人家の庭、寺の境内などであった。一方、幼体の生息場所は越冬期も含めて、水田、水路、湿地、小池などの浅い水辺を利用し、成体とは環境を異にすることがわかってきた。また、行動圏も成体と比べるとかなり狭いことがわかってきた。これらより、産卵場と幼体の好む浅くて安定的な水場という微環境をセットで確保することが、イシガメ個体群の維持に必要な要因の1つと考えられた。

今後も継続して個体群調査を行い、孵化幼体の分散過程やその後の成長に伴う変化を追跡調査することで、寿命の長いイシガメの保全に有効となる生態学的知見を増やしていきたい。

研究助成

知床国立公園とその周辺におけるヒグマと人の共存の道を探る調査研究

下鶴倫人（北海道大学大学院獣医学研究院）北海道



一頭の「新世代ベアー」にGPS首輪を装着し、行動を追跡する

ヒグマの背擦り木に付着した毛を採集し、遺伝子解析に用いる

ヒグマは北海道を代表する野生動物であり、日本で唯一野生のクマの姿を見ることができる知床半島では自然観察資源の一つとなっている。一方で、住宅地への侵入や農作物被害など、人との軋轢が問題となっている。また近年は人の存在を脅威と感じず、繰り返し人前に現れる「新世代ベアー」が知床国立公園内を中心に増加し、人との危険な遭遇が日常的に発生している。本研究は、新世代ベアーが生じる背景を知り、その行動特性に関する知見を深めることを目的として行った。

まず、新世代ベアーが生じる背景を明らかにするため、国立公園内外において人前に堂々と現れ、頻繁に住宅地・農地周辺に出没するヒグマから、糞や毛などの試料を採取し、遺伝子分析により個体識別や個体間の血縁関係の解析を行った。この結果、一部の人慣れした個体とその子らが、頻繁に人との軋轢を引き起こしていることが明らかとなった。また、高度に人慣れした母親から生まれた子のうち、特にオスは出生地から分散する過程において、住宅地・農地周辺に出没して駆除される傾向が高いという現実が明らかになった。

さらに現在は、国立公園内で頻繁に人前に現れる一頭の母グマにGPS発信機付きの首輪を装着し、その行動パターンを調べるとともに、人為的な追い払いの効果を検証しているところである。このような取り組みを今後も発展させることで、新世代ベアーを過度に増加させないための有効な方策をたてることに繋げていきたい。

研究助成

石狩海岸における希少アリ類・海浜植物・外来カエル類の相互関係に関する研究

吉田剛司（NPO法人EnVision環境保全事務所）北海道

7,664株のイソスミレを確認した

トラップで捕獲したアズマヒキガエル

本州では在来カエルのアズマヒキガエルも北海道にとって外来種となる。アズマヒキガエルは、北海道の一級河川である石狩川流域沿で分布を拡大し、2005年には石狩川河口域（石狩浜）で分布が確認された。石狩浜には国内で最大規模の海浜植生群落が存在し、なかでもイソスミレの国内最北端の生育地でもある。さらに、イソスミレの種子散布を担うアリ類にも希少性の高い種が多く存在し、特にエゾアカヤマアリのスーパーコロニーは世界的にも稀な大規模コロニーとして、IUCNのレッドデータブックに記載されている。一方でアズマヒキガエルは、アリ類の捕食者としての影響が懸念される。

そこで本研究では、希少アリ類とイソスミレ、さらにアズマヒキガエルの相互関係を解明するために、イソスミレの減少状況の把握、アリ類の分布、そしてアズマヒキガエルの効果的な防除と影響の把握を試みた。イソスミレの株数を2012～2013年の調査結果と本研究（2018年）で比較したところ、33％の減少が確認された。さらにアズマヒキガエルの胃内容物からは、11種のアリが確認され、希少性の高いエゾアカヤマアリ、ツノアカヤマアリ、さらにイソスミレの種子（エライオソーム）散布を担うアリ類も含まれた。アズマヒキガエルの侵入がイソスミレの減少に起因したとは断言できないが、今後はアズマヒキガエルによる間接的な海浜植生への影響が懸念される。本研究では、アズマヒキガエルの防除も実施し、2018年には2270匹の駆除も実施した。

愛子子どもの森の保全とふれあい活動

千田初男（森の応援団 愛子ハグリッズ）

「うわー、虫がいっぱい！」
「きゃー、気持ちわるー」
「お花きれい！」

『愛子こどもの森』と名付けられた雑木林の木々の間を子どもたちの歓声が通り抜けてゆきます。多数の地権者のご厚意で始まった活動も、現在は市立小学校の授業と親子ふれあい活動、他団体との協力活動など多岐にわたっています。

夢のある楽しい授業

愛子ハグリッズによる授業は5人の講師で行います。最初は、森や虫などへの抵抗を和らげる導入の授業「森のかくれんぼ」。草むらの中に本物そっくりの動物のフィギュアを隠し、いくつ見つけられるかというものです。集中力、観察力、怖いものへの抵抗力軽減などに効果ありです。次に5人位でグループを組み、好きな木を選び好きな名前を付けて1年間観察する「マイツリー」。比較的変化が顕著な低木を選びます、本当の名前も一緒に覚え由来も確認します。7月の初めごろは幼虫からサナギになりかけのカブトムシを床から特性ペットボトルに移し成虫になるまで教室で観察、成虫になったら森に放してあげるという「カブトムシ授業」。幼虫は動くし、サナギは形が変化するし、観察中に死んでしまうのもいる。命について考え始める時期でもあります。そして4種類くらいのキノコの菌打ちをして、原木栽培体験と菌の働きを学ぶ「キノコ授業」。最後が命の繋がりと大切さ、目に見えない物の大事さ、妖精を探すような楽しさの「生態系授業」。

以上が仙台市立愛子小学校3年生の総合学習の一年を通した授業です。私以外は皆その道の専門家で、市立自然体験研修施設勤務の「森のかくれんぼ」の近江さん。樹木医で造園業の「マイツリー」の樋口さん。森林インストラクターの「カブトムシ授業」の芳賀さん。キノコ会社役員の「キノコ授業」の郡山さん。そして「生態系」の私。皆それぞれの個性を発揮して夢のある楽しい授業を目指しています。

泥だらけの水だけど感動の出水

森を体験する機会

授業と並行して年4回ほど親子で森体験の機会を設け、木工クラフト、樹木観察、箸作り、かまどで火おこし、カブトムシの床作り、小学校の先生たちのミニコンサートなどの企画で楽しんでます。どのイベントも150人程の参加者になりました。授業と体験活動の同時並行の最大の特徴は、好きな子は二重に楽しめ、そうでない子も授業で半ば強制的に森を経験するということです。最初抵抗があった子も友達と一緒、かつ何度も経験するうちに慣れて楽しめるようになります。座学の授業との相乗効果も確認できるようになりました。

またPTA、児童館等外部からの依頼も多くなり、大きいものでは仙台市子ども会連合会のイベントの運営を請負い、3年間継続しました。モータースポーツ施設のスポーツランドSUGOでのレース観戦、BBQ、森体験とクラフトなどを運営し参加者から喜ばれました。中学生ボランティアや私たちを取り巻く様々な団体、町内会、社会福祉協議会、行政機関の皆様にも参加いただき活動の理解を深めていただきました。

会を支えるスタッフ陣

FGF の助成で完成した立派な井戸

森にかくされたフィギュアを探す

原木栽培のための菌打ち

班ごとに調べたことを発表しました

メモを取りながら学習する子どもたち

先生よろしくお願いいたします！

妖精と一緒に楽しい夢を

自分が地球の一部であること。命はすべてつながっていること。森は、テレビやゲームでは学べない、生きていく上でいちばん大切なことを知ることができる「もうひとつの教室」です。そして「子どもが真ん中」の森づくりをし、子どもたちの発想力を広げ、感性豊かな子どもを育てます。

このような何があっても曲げないコンセプトを最初に皆で決めてスタートし、守り続けてきました。竹藪を切り開き、下草を刈り、授業のできる道を作りました。東日本大震災で一時活動が停止しましたが、その後試行錯誤を繰り返しながら現在の形にたどりつきました。

森の中で子どもたちと木を調べ、虫を探し、鳥の声を聴き、風の調べに目を閉じて妖精の姿をそっと想像し、一緒に遊んでみる。楽しいひと時をすごしながら夢は続いてゆきます。

サナギって動くんだね

参加者全員で「はい、チーズ」

カブトムシのサナギ

森への感謝を音色に込めてミニコンサート

FGF助成一覧 174件のFGF助成先をご紹介いたします。

※団体名・所属名等は助成当時のものです。

●1984年度
1 オオムラサキの森づくり
2 自然を守り生かす青少年の森づくり
3 社寺林の保全・管理に関する法学的研究
4 リスのいる森づくり

●1985年度
5 子供たちのフォレスト・ファーミング
6 屋敷林の保全と活用
7 明神地域の保全・活用に関する生態的研究
8 知床の大型野生動物の生態と自然教育への活用に関する研究

●1986年度
9 自然と芸術の森づくり
10 ドングリー粒運動による広葉樹林の育成
11 歴史的居住環境の保全と利活用に関する研究
12 伝統的な人里環境の生態学的研究

●1987年度
13 ギフチョウが舞いサギ草の咲き乱れるコウヤマキの森づくり
14 自然史博物館「嵐山自然と文化の森」の保全と活用
15 自然の宝庫・桶ヶ谷沼を生かしたまちづくり
16 飛騨山脈の自然生態調査と一般登山活動での自然学習のあり方
17 緑と人間の親和性を高める環境絵本づくり

●1988年度
18「いろりの里」生活原体験及び自然観察会
19 雑木山から生活文化を問い直す
20 野外博物館「山の子村」の保全と活用
21「市民による雑木林の保全・管理」のテキストづくり
22 神社の社叢における神樹の調査研究

●1989年度
23 寒風山「風雪の森」づくり
24 花いっぱい鳥いっぱいの森づくり
25 荒廃したサンゴ礁を復元するサンゴ移植活動
26 トロッコ道に見る霧島連山百年の変遷について
27 裏磐梯湖沼の生態と自然保護教育への活用に関する研究

●1990年度
28「望ヶ原天然林」を生かした自然に親しむ活動
29 見沼カムバックふるさとプラン
30「帯広の森」野生動物とのふれあいの場づくり
31 イトウのすめる森づくり
32 ホタルの生息する人里の水系環境保全と人間活動の調和

●1991年度
33 奥球磨山地に「人間の森」をつくる
34 ネイチャートレイルの設置活動から村の自然のサンクチュアリー化運動へ
35 谷津干潟保全対策の研究
36 糸島地方の自然解明とその保護及び一般への啓蒙

●1992年度
37 農山村エコミュージアムづくりによる都市・農山村の交流
38 紀伊半島沿岸におけるウミガメの調査及び保護活動
39 御前・釈迦岳ブナ・シオジ林の自然とその保全について
40 湧水に生息する生物の生態研究

●1993年度
41 森は海の恋人
42 森・人・生きもの・地球を緑の輪で結ぶ京都大原野の体験森づくり
43 坪井川遊水池における生態系の復元
44 十津川村地方における伝統的養蜂の調査研究
45 宮古諸島におけるサシバと緑と人間の親和性を高めるための基礎研究

●1994年度
46 ジュンサイ再生保全活動による緑と生きものの復元
47 子供達と水生生物との共生をめざす湿地「たんぽ水族館」の保全と利用に関する研究
48 あなたにも出来る保全生物学
「市民による絶滅危惧植物の保全研究のマニュアルづくり」

●1995年度
49 筑波山に炭焼きの里づくり
50 コアジサシの生態調査及び保護運動と水辺環境の復元
51 生活光とホタルの共存について
52 オオサンショウウオの生息状況調査

●1996年度
53 市民参加型緑地保全活動の実践及び推進
54「新タンポポ地図」の作成とその環境教育への応用
55 高知県宇佐竜蟹ヶ池における水湿植物の保全に関する生態学的研究
56 学校緑地にビオトープを導入するための基礎的研究

●1997年度
57 里道の修復による赤目の里山の保全
58 手作りの湿地や水辺の復元運動
59 多摩ニュータウン19住区の農業公園化構想
60 岡山県内の水草の種類と分布、その環境に関する研究およびミズアオイの保護活動

●1998年度
61「体験の森づくり」活動
62 草原・里山の維持管理技術の啓発と実践による半自然植生の保全
63 森林活動による精神発達障害者の療育効果に関する研究
64 小動物の利用環境として都市残存林を評価する手法の研究と生態ガイドブックの作成

●1999年度
65 農業体験教室「草の根農業小学校」の運営
66 絶滅危惧植物ガシャモクの保全生物学的研究
67 ニホンザリガニの分布・生息環境とその保全に関する研究

●2000年度
68 野尻湖における水草帯の復元と環境教育
69 スノーケリングによる藻場・海中林及びアマモ場を主体とした海中自然観察会
70 豊かな里山を次世代に残すために

●2001年度
71 大町グランドワークによる上原ビオトープ創出事業
72 えひめあやめ指定地その周辺里山整備計画
73 市街地緑地の種の保存と供給機能の研究

●2002年度
74 有明海および島原湾の底生生物データベース作成
75 多摩川中流域河床の「地層の野外観察」用の観察路と支援システムの構築

●2003年度
76 林業スクール
77「やまんばの森」の「春の女神」保護活動
78 東京都府中市立南白糸台小学校
「水色の学校プロジェクト」
79 沖縄県、慶良間諸島にみられる貴重な森林生態系の持続的保全と活用

●2004年度
80 子供達とヤマネの巣箱製作、設置、生態と生息する森林生態系の観察と記録
81 霧多布湿原ファンづくりのための木道修復活動
82 金沢市とその近郊の農業用水の生物多様性維持機能を高めるための基礎的研究
83 桂川・相模川水系におけるシジミ類の生息調査及び在来種マシジミの保存に向けた繁殖実験

●2005年度
84 研究者と市民の協働による里山の生物多様性保全のための活動及び調査
85 田舎暮らしグラウンドワーク・ウスイロヒョウモンモドキの舞う蒜山高原自然再生事業
86 瀬戸内海の干潟における貝類を中心とした環境指標生物の探索
87 環境教育機能を備えた学校林の生態管理システムの構築

●2006年度
88 小網代の森保全推進のためのパトロール活動
89 里山と共に育つ学校の森づくり
—里山が育つ、里山と育つ、里山から育つ—
90 名古屋周辺における外来カメ類の現状調査と在来カメ類の保護・保全活動
91 水田におけるゲンゴロウ幼虫の保全に関する野外調査研究

●2007年度
92 赤とんぼ全国調査
93 ニッポンバラタナゴを救う伝統的農業水管理法「ドビ流し」の効果
94 日本におけるカキ礁生態系の研究と保全
95 都市的環境で在来種が外来種に駆逐される要因の解明

●2008年度
96 公園管理と蛍の養殖
97 湖北野田沼内湖の再生で動き出す琵琶湖のいのちプロジェクト
98 身近な地域・自然を学ぶ環境学習の教材化とプログラムの構築
99 ヒサカキの種子散布にかかわる生物間相互作用が三宅島の森林生態系回復に果たす役割
100 筑後川の支川・小石原川におけるアカザの生態
101 重タデ原・坊ガツル湿原における火入れによる土壌環境改変の実態とその効果の検証
102 休耕田を利用した湿生植物群落の回復

●2009年度
103 遊んで学ぶ里山体験
104 栗山鳥の下自然公園・ムクロジの里ステップアップ事業
105 カンキョウカジカの生態研究とその保護対策について
106 奄美大島湯湾岳の野生絶滅植物リュウキュウアセビの復元に向けた遺伝解析
107 秋吉台の絶滅危惧植物の保護に向けたゾーニングのための基礎研究
108 中央アルプス山麓の里山に生息する絶滅危惧種ミヤマシジミとヒメシジミの保全に関する研究
109 京都・平安神宮内の池に生息するイチモンジタナゴの保護

●2010年度
110 参加型フットパス・ツーリズムの振興による棚田・里山環境の保全とその活用
111 生駒市西畑地区の棚田・里山の再生と創造
112 スナメリから見つめる瀬戸内海
113 福岡市室見川におけるシロウオの産卵環境の解明と住民参加型の保全活動について
114 琵琶湖固有亜種とされるビワマスにおける遺伝的多様性の変化
115 昆虫類を指標とした都市近郊の里山の生物多様性評価手法に関する研究

●2011年度
116 高校生・若者による埼玉県小川町での里山づくりと環境教育活動
117 MY大嵐山方式（会員ボランティア）による大嵐山の自然環境保全運動の仕組みづくり
118 牛耕復活による里山のたたずまい再生
119「干潟生物の市民調査」手法による八代海のベントス相調査
120 東北太平洋沖地震津波による蒲生干潟周辺域の被害現況調査と海浜性生物の再定着プロセスの解明

●2012年度
121 大人も子どもも谷戸で楽しく自然体験
122 伝統的循環型農業の復活と自然素材を活かした古民家再生によるツシマヤマネコと共生する村づくり
123 多摩川における外来魚調査及び外来種問題啓発活動
124 ラムサール条約登録湿地・伊豆沼・内沼の食物網における放射性物質の濃縮の評価
125 大分県指定天然記念物カマエカズラの繁殖生態と保全に関する研究
126 野生鳥獣の放射能汚染が狩猟者の捕獲活動に与える影響

●2013年度
127 3次元GISモデルを用いた八王子滝山里山保全地域の環境モニタリング活動
128 日本に留学している大学生の中山間地域における日本文化体験プログラム
129 来浜者の踏圧がウミガメのふ化に及ぼす影響についての調査
130「家族で学ぼう福島環境教育エコツアー」開催事業
131 石川県沿岸に生息する絶滅危惧種イカリモンハンミョウの生態解明と保全対策の検討
132 北海道平野部における野生生物による防風林の利用状況に関する研究
133 身近な自然体験の教育的効果の検証 ～多摩市内の里山環境を生かした教育実践の総合的調査～
134「震災後の増田川から持続可能な地域社会へのアプローチ」

●2014年度
135 小笠原諸島、西島の森林再生
136 愛子子どもの森の保全とふれあい活動
137 ロープ魚礁とアマモによる生態系の創出活動
138 鹿児島県出水市における保護ツルの臨床検査
139 琉球列島中部域における造礁サンゴの新規加入幼生の種多様性と遺伝学的集団構造に関する研究
140 奄美諸島における希少野生植物の繁殖に関する生物相の基礎的研究
141 東日本大震災の津波被災地における地域農業資源の保全に関する実証研究

●2015年度
142『多摩川のケヤキと共生する会』青梅市多摩川流域のケヤキの食葉性害虫からの救済と緑陰の維持
143「松代おやっこ村」 魅力アッププラン
144 奈良県レッドデータブックに記載されている自生山野草の保全と管理
145 野焼きボランティアのための難燃性ゼッケン製作
146 市民調査による岩手県の植物相の研究
147 希少動物アマミノクロウサギ保全に向けた分子遺伝学的アプローチ
148 対馬に生息する希少植物種を保全するための植生回復および栽培試験に関する調査研究
149 サクラにおける効率的な挿し木繁殖法の確立およびサクラ遺伝資源の保存・管理に関する基礎研究

●2016年度

150
京都府立須知高等学校の「ウィードの森」の生態調査と里山の整備
●京都府立須知高等学校 PTA
●京都府
● 170万円

151
名勝・重要文化的景観「おばすて（田毎の月）」棚田の保全活動
●田毎の月棚田保存同好会
●長野県
● 90万円

152
はぐくむ、つなげる、つたえる、まもる、谷津田の生きもののいのちのにぎわいとつながり
●特定非営利活動法人ちば環境情報センター
●千葉県
● 90万円

153
大淀川の絶滅危惧植物「タコノアシ」の保全活動
● NPO法人大淀川流域ネットワーク
●宮崎県
● 34万円

154
ドローンとVR技術を活用した里山ランドスケープのモニタリング手法の開発
●一ノ瀬友博（慶應義塾大学）
●神奈川県
● 110万円

155
GPS首輪を用いた積雪地域におけるイノシシの行動特性
●山本麻希（NPO法人新潟ワイルドライフリサーチ）
●新潟県
● 110万円

156
遺伝情報を用いた絶滅危惧植物ヤチシャジンの野生集団の再生
●渡邉園子（広島大学大学院）
●広島県
● 100万円

157
外来アライグマの営巣特性調査と対策コスト削減のための巣箱型ワナの開発
●池田透（北海道大学大学院）
●北海道
● 140万円

●2017年度

158
女川学びの森の整備と利活用促進
● NPO法人女川ネイチャーガイド協会
●宮城県
●85万円

159
里山を活かしたこどもの遊び場と大人のコミュニティスペース
●土沢森あそびの会
●神奈川県
●60万円

160
子どもたちによる里山再生プロジェクト
●南アルプス子どもの村中学校
●山梨県
●100万円

161
豊田市の中山間地を舞台とした多世代参加型の自然とのふれあい活動
●豊田高専ドミタウン実行委員会
●愛知県
●40万円

162
東京藝術大学上野キャンパスにおける武蔵野の植生再生と維持の活動
●東京藝術大学キャンパスグランドデザイン室
●東京都 ●160万円

163
ニホンイシガメの保全を目的とした生活史の解明
●小賀野 大一（東邦大学理学部）
●千葉県
●165万円

164
知床国立公園とその周辺におけるヒグマと人の共存の道を探る調査研究
●下鶴 倫人（北海道大学大学院）
●北海道
●145万円

165
石狩海岸における希少アリ類・海浜植物・外来カエル類の相互関係に関する研究
●吉田 剛司（酪農学園大学）
●北海道
●95万円

●2018年度

166
大人も子どもも楽しく安全に自然体験が楽しめるガイアの森づくり
● NPO法人 ガイア自然学校とやま
●富山県
● 150万円

167
みちのく潮風トレイル利用促進のための歩行データの調査・研究
●特定非営利活動法人 みちのくトレイルクラブ
●宮城県
● 200万円

168
豊北の水と生態系の研究・下関北高協同～粟野川流域図作成を原点に～
●北高夢ロード実行委員会
●山口県
● 50万円

169
海岸の自然観察を通じてマイクロプラスチックの危険性を学ぶ
●特定非営利活動法人 サンクチュアリエヌビーオー
●静岡県
● 60万円

170
伊豆諸島青ヶ島の絶滅危惧種が生育する噴気孔原群落の保全にむけた基礎研究
●上條隆志（筑波大学）
●東京都青ヶ島
● 50万円

171
天然記念物ミヤコタナゴの再導入等の候補地の探索および生息域の再生手法の検討
●鈴木規慈（三重大学大学院）
●千葉県
● 150万円

172
網走市こまば木のひろばにおけるエゾモモンガの生態調査
●後藤ひとみ（東京農業大学）
●北海道
● 30万円

173
巨樹・名木とそれを取り巻く地域社会における生態系サービス及びEco-DRR機能の定量的評価
●宇野宏司（神戸市立工業高等専門学校）
●兵庫県 ● 70万円

174
岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発
●島田直明（岩手県立大学）
●岩手県
● 90万円